
主観論?

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主観論？

【Nコード】

N5789L

【作者名】

都神紗茅

【あらすじ】

『主観論』の第二弾。作者が、ある曲を元にして書いた小説をあつめた短編集です。ひとつひとつの話に特に繋がりはありません（ある場合は記載しておきます）。あくまで作者の主観で書いた話です。そのあたりはご了承下さい。新蘭メイン、時々平和や少年探偵団モノも出てくる予定です。更新は不定期。

s t o r y . i H A L F W A Y (前書き)

- ・登場人物 新一、蘭
- ・傾向 シリアス

story・1 HALFWAY

カーテンの隙間から朝日が部屋に漏れている。この瞬間に出会うのもこれで何日目だろうか

パソコン画面から目を離して、新一は深く溜め息をついた。

元の姿に戻ってから、かつて 工藤新一としての よりも更に警視庁からの捜査協力依頼が増えた。

自分が誰かに必要とされているなら、行くしかないけれど。

毎日まいにち事件の資料とにらめっこする日々だ。

事件の捜査に出かけたり、容疑者に話を聞いたりもする。

折角蘭と同じ大学に入学したのに、まだ二、三日しか授業に出ていない。

今から進級できるかどうかが不安だ。

日が経つにつれて自分の私生活としての時間がどんどん削られていつているような気がしていた。

蘭と最後に会ったのっていつだったけ？

思い返してみても、思い出せない。一週間前？ いや、もっと前だったか……？

自分の日常が他人の事件に関する予定で回っている。決して蘭の存在を忘れていく訳ではない。

探偵の仕事をしている時は私情を挟まないようにしているから、どうしても彼女は二の次になってしまうのだ。

次に時間が取れたら、アイツと旅行にでも行くか

それだけ考えると、事件の資料を整理するため再びキーボードを叩き始めた。

たあいがないその考えも、数分経つたら彼の頭からすっかり消え去っていた。

「らん！ おはよう」

「あ、園子！ おはよ」

背後から聞こえてきた親友の明るい声に、蘭は振り向いて笑顔で応えた。

蘭、新一、園子の三人は学部が違うといえども同じ大学に入学した。新一は高校二年生のときにしばらく休学していたものの何の問題もなく大学入試に合格した。

それを知った時に、園子は冗談っぽく嫌味を言った。彼女の性格を知っている新一は苦笑するしかなかった。

初夏を迎えたばかりの今日の東京は、とても過ごしやすい爽やかだ。

蘭と園子は毎朝、大学の敷地内にある並木道を歩きながら話をしていく。

今日も二人はいつものように歩き始めた。

「今日も新一君来てないんだ？」

「そーなのよ。最近連絡もあんまり取れないし、事件で忙しいみたい」

「まーったく、あの推理オタクはしょうがないわね！ やつと帰ってきたと思ったらまたか」

「しょうがないよ。新一を必要としてる人がたくさんいるんだもの」

「そうだけどさ。あの男、事件にウツツを抜かしてる間に蘭が他の男に取られたらどうしよう、とか考えないのかねえ」

「事件の調査の時は推理に集中するから……っっていうか、普段からそういうことは考えてないと思うけど」

「ったく、どんだけ自分に自信あるのよ新一君は……。少しは彼氏としての自覚を持てっつーの」

そういつて園子は、片手に持っていたコーヒー牛乳を一口飲んだ。蘭は園子の言葉を否定することも、肯定することもない。ただ前を見ているだけだ。

付き合いの長い園子は、彼女の気持ちをちゃんと分かっているつもりでいる。

新一が帰ってきた時の嬉しそうな彼女の様子も、悲しげな表情でいる時の彼女もずっと見てきたからだ。

「新一君と最後に会ったのいつ？」

「先月の最後の日曜日、かな」

「そんなに会ってないの？ メールとか電話は？」

「メールの返事来ないし、電話も出ないよ。多分ずっと電源切ってると思う」

そう言って寂しげに少し俯いた。彼女が一番新一の忙しさを分か

っているからこそ、何も出来ないのだ。彼に負担をかけたくなって、ワガママを言うことも出来ない。家に押しかけるのも、迷惑かなと
考えてしまう。

「蘭……大丈夫？」

「平気よ。こつこつというの慣れてるし。……じゃあ、授業あるからもう
行くね」

「あ、うん……」

戸惑っている園子にこれ以上何か言われないう、蘭は小走り
で教室に向かった。

もっと何か言われたら、泣いてしまつかもしれないから。

いつそのこと、もっとわたしがワガママになればこつこつやって悩
むこともないのかな

そんなことを考えたら少し涙が出てきたため、目をこすってごま
かした。

「ただいま」

既に日はすっかり沈み、街灯がぼつりぼつりと夜の闇に浮かんでいた。

事務所も家も真つ暗だ。蘭以外、誰もいなかった。小五郎は今朝から他県へ事件の調査に出かけていた。

ただいまと言ってからそのことに気づいた。

溜め息をついて、靴を脱ぎ家の中へと入る。静まり返った室内にいと、今日は何故か落ち着かない。早くお父さん帰ってこないかな、と思った。

その時、バッグの中に入れている携帯電話が着信を知らせた。

バッグから取り出してみると、園子からのメールが来ていた。

何だろう、と思ってメールを開く。そこには。

『やっぱり私は、新一君に蘭が思ってることちゃんと説った方がいいと思うよ。蘭が辛そうな顔してるの、私見たくないからさ。思い切って家に押しかけてみれば？ 蘭はれっきとした新一君の彼女なんだから』

少し考えてから、メールの返信画面を開いた。

『じゃあ、これから行ってみるよ。ありがとね、園子』

携帯を閉じ、もう一度靴を履いて外へ出た。今日だけはわがままになってもいいよね、と自分に言い聞かせて。

数分後、新一の家に到着した。一階は真っ暗で、新一の部屋だけ明かりが灯っていた。

蘭がチャイムを押すと、家主がすぐにインターフォンに出た。

『……はい？』

「あ、新一。わたし。今行っても大丈夫？」

『ああ……いいよ。玄関開いてつから、勝手に入って』

声に元気がない。やはりすごく疲れているらしい。ずっと事件が続いているのだろうか。

彼が体調を崩していないかが心配になりつつ、蘭は門の扉を開いた。玄関から室内に入ったが誰もいなかった。思ったとおり、リビングがやダイニングは真っ暗だ。

蘭が今いる玄関付近と二階に続く階段、そしてその先の廊下だけ電気がついてる。

スリッパに履き替え、階段をゆっくりと上がっていく。物音は何も聞こえない。

本当に人が室内にいるのかどうかさえ疑いたくなるほどであった。

二階の廊下の突き当たりにあるのが新一の部屋だ。広い家ではあるけれど何度か訪れているから覚えている。

ただし、ちゃんと室内に入るのは何週間かぶりである。

完全に閉まりきっていないドアを開けると、机の上に置いてあるパソコンとにらめっこしている新一がいた。
頼杖をして、もう片方の手でマウスを操作しながら。ぼんやりとした表情だった。

「新一……久しぶり、だね。こうしてちゃんと会うのは」
「ああ、そうだな」

蘭の方も見ずにそれだけ言うと、新一はまた手を動かし始めた。彼の頭の中は今担当している事件のことについていっぱいだ。そこへ蘭がやってきたことで、少しばかりバランスが崩れそうになる。

彼に聞こえぬように溜め息をついてから、蘭はとりあえず部屋の中にあるベッドの上に腰掛けた。
ベッドと机はすぐ近くにあるため、やろうと思えば彼にすぐ手が届くような位置にいる。
だけど、そうする訳にも行かない。否、出来なかった。差し出しかけた右手を空中で止め、すぐに引っ込めた。

「ちよつと痩せた？」
「ん、そうかもな。最近あんまり飯も食ってないしな」
「じゃあこれから作るっか？」
「いや、いいよ。買い物も行ってねえから材料もないだろうし」
「……そっか」

会話が上手く続かない。前はどうやって話してたっけ、と思わず考えてしまう。

やっぱり邪魔しないで帰った方がいいのかもしれないと思った。

「いざ」と心を決めて来たのはいいけれど、やはり本人を前にするとワガママなど言えなかった。

傍にいて欲しいと言うのは簡単だけど。 。 蘭が色々と思いを巡らしていることにも、新一は全く気づいていない。

被害者の状況、被疑者の証言やアリバイ、事件の背景。 上手く考えがまとまらなくて、若干苛立っていた。

この頃あまり寝ていないのもその原因の一つだった。

そんな彼を見ていて蘭はいたたまれなくなった。 ベッドから立ち上がった、彼の真後ろまで二、三步だけ歩く。

そして、椅子に座っている彼を後ろからそっと抱きしめた。

彼女の行動を全く予測していなかったのか、新一は少し肩を震わせたもののそのままだった。

肩にあごを乗せる。 心なしか体も少し冷えているような気がした。

「事件、大変だと思うけど、あんまり無理しないで。 体調崩しちゃわないかって心配なの」

その一言に、新一は大きく溜め息をついた。 そして、思わず口走ってしまった言葉は。

「オメーは楽でいいよな。 待ってるだけでいいんだからよ」

「え……」

はつと気づいた時には、もう遅かった。二人しかいない空間に重い空気が流れる。

ただでさえ静かだった室内は更に何も聞こえなくなり、まるで誰もいないかのようになった。

「わ、悪い蘭、今は」

「そっだよ。……邪魔してごめんなさい。もう帰るね」
「蘭っ」

言葉を遮って蘭はそっと新一から離れた。そして、振り返った彼の顔も見ずに部屋を出て行った。

追いかけて謝らなければいけないのに、新一の体は椅子から離れなかった。

それは、自分に追いかける資格などないと思っっているからなのかもしれない。

蘭が部屋を出て行く瞬間、新一は彼女の目から涙が溢れていたのを見てしまったのだ。

街灯の下を蘭は家に向かって歩いていく。

新一の家から少し離れたところで、一旦立ち止まった。目から溢れてくる涙を拭えど拭えど、止まらない。

彼にとって自分の存在は負担になっているのかもしれない。

それならば、いっそもう完璧に離れてしまった方がいいんじゃないだろうか

再び歩き始め、新一のことを思った。

彼が熱く語っていた、探偵になるという夢。

いつも自慢げにホームズを話す声。

物事を考える時の仕草も。

全て、まるで昨日のことのように覚えている。

もっとわたしが、新一のことをちゃんと考えてあげればよかったのにな。

小さな声で、蘭はもう一度「ごめんなさい」と呟いた。

そして、ふと後ろを振り返ってみた。後ろには人っ子一人いない。

これからどうなるのだろうか？ 考えてみたけれど、蘭には全く想像がつかなかった。

story・i HALFWAY (後書き)

作者が個人的にやりたかった『主観論?』! 第一弾を読んでくださった方は分かるかと思いますが(苦笑)この話に限らず全体的にやりたい放題やっちゃってます。

今回の話は新蘭モノということ。幸せいっぱい……っていう話じゃないませんが;;あえて最後は濁してあります。この後二人がどうなったかは読者の皆さんのご想像にお任せします。元にした歌詞の世界を一応守りつつってことで。一発目からこの暗めな話?でいいのかと若干迷いましたが、こういう類の話を書くのも好きなので決して新蘭をいじめたい訳ではないですよ(^^;)。第二話以降どこかで新蘭の幸せな話も入れる予定なので!新蘭好きの方は乞うご期待!

【参考にした曲】Sallyu『HALFWAY』

s t o r y 2 また あした(前書き)

- ・登場人物 新一、蘭
- ・傾向 ほのほの

story・2 また あした

「あのさ、蘭」

「何？」

蘭は少し首を傾けて、新一の言葉の続きを待っている。

自分では自覚がないのだろう。大きな瞳をパチクリさせて、少し頬を染めている。

普通の女の子ならこの手の表情を自分で作ることはあるだろうが、彼女は違った。

新一の隣で一緒に歩きながら、風で少し乱れた髪を直しながら、新一を待つ。

その行為の全てが非人工的になされている。彼女には計算というものが存在しない。

そんな彼女を少し見るだけで、新一はその顔が熱を持ち始めてしまう。

彼女の全てが自分にとっていとおいしい。やべーな、どうかしてるなオレは、と新一は思う。

しかしながら昔からそうだといいことを一番自覚しているのも、元からどうかしているのかも、とも考えて内心苦笑した。

探偵という職業柄、アレコレ思いをめぐらすことは多い。それが実生活にも顕著に表れてくる。

「えーと、だからそれは」

「何よ、はつきりしないわね」

「ハハハ……わり、やっぱり何でもねーや」

「えー？ そう言われると気になっちゃうじゃない」

今、自分の中にある思いを上手く伝えるにはどうすればいいのだから？

事件の犯人を追い詰める時には、多種多様な言葉を駆使していくのだけれど、目の前にいるたった一人に対しては何故か上手くゆかない。このあたりのことはどうも苦手だ。

ただ「好きだ」とか「愛してる」とかを言うだけでは伝わらないこの気持ち。

（その類の言葉を伝えるのすら新一は苦手だ）

かつて新一は蘭の元へと帰ってきた時には、勢いで自分の気持ちを彼女へ伝えた。

彼女と両思いになることは出来た。しかし、その時以来恋人同士らしいことが何もないのもまた事実である。

ずっと幼馴染としての付き合いだったからすぐに恋人らしく振舞うのはとても難しいことなのだ。

あの時のように出来ればいいんだけど……。そうやって考え込むと逆に何も出来ず、もちろん言葉も一切浮かんでこない。

きっかけが何かある訳でもなし。いやいや、きっかけて作るものなのか？

彼の考えこんでいる様子を見ながら蘭は言葉を続けた。

「新一、最近変だよ？ じっくり何か考えてるみたいでさ。何かあったの？」

「え」

どきり、とする。彼女にまるで心を読まれているみたいだ。

「いや、別に。そんな大したことはねーけど」

「けど？」

「けど……ウン」

何か次に繋がってしまいう前に、新一は自分で勝手に頷いてこの話題を終わらせようと試みる。

あんまりこれ以上何か触れられるのもちよっとアレだな、と指示語だらけの文章を自分の中に並べた。

いつか彼女には言えるだろう……いつかは。時間がない訳ではないし、と思った。

彼女は訝しげな表情を浮かべる。

「わたし、この前園子から聞いたんだ。自分が言いたいことを今言わずにいつか言えればいいやって思っちゃうと、いつまで経っても言えなくなるんだって」

「ま、まあそれはそうだよな」

コイツにはオレの思ってることが分かるんじゃないか？

今度はさっきよりもどきりとした。ああ、心臓が悪い。

「今の時間を大切にしなきゃ、これから先もずっと大切に出来ないよって。最初は何だか園子らしくないなって思ったの。だけど本

当にその通りだなんて。京極さんが忙しくていつも一緒にいられる訳じゃないからこそ一緒にいる時間を大事にしたい、って言ったの。だからわたしも見習わなきゃって」

「……蘭」

「あ、ホラ、新一ずっと事件でいなかっただでしょ？ だから園子が言ってることもよく分かるなあって」

顔を赤くしてあたふたしている。そんな彼女を横目に見ながら、新一は彼女の言葉をかみ締めていた。

一緒にいる時間を大切にする。

そうか、そうだよな。当たり前のことなのに忘れてたな。当たり前すぎたからこそ見えなくなっていたのかもしれない。

いつか自分が江戸川コナンとして蘭の傍にいた時のことを思い出した。

工藤新一として蘭と過ごした日々の重さをかみ締めたことは、あの頃は幾度もあったけど。

今となつては、穏やかで平和な日常に慣れ過ぎちゃったんだな、と。

「本当その通りだな」

そう言っつて右手の近くにあつた蘭の左手をそつと握った。

前触れもない行動に蘭は少しばかりびっくりしたが、すぐに手を握り返した。

手のひらから彼女の温もりが伝わってくる。華奢な手は少しでも強く握ったら折れてしまいそうだ。

この手がいつもあの空手技を繰り出しているようには思えないと考えたことは、置いておいて。

どこにでも転がっているような平凡を大事にしよう。
そんなことを思っている新一に、蘭は前を向いたまま言う。

「新一、やっぱりらしくないね」

「うっせーな」

「ふふふ、照れてるの？」

「バ一口、んなんじゃねーよ」

「何か変なものでも食べたとか？ それとも熱でもあるの？」

「……人が真面目になつてんのにその言い方はねーだろ？」

「だって新一いつも推理とか事件のことしか話さないもの」

「あのなあ、それ以外にも話すことくらいあるっつーの」

「えー本当？」

冗談ぽく笑う蘭。彼女を見ていると淡い気持ちが湧き上がる。この気持ちを伝える「いつか」というのは、きつと「今」のことなんだろう。

いざ決意して、新一はぴたりと立ち止まった。そして砂とコンクリートが混在している地面を見つめる。蘭はその表情を探ろうとするけれど、俯いているためどんなものかは分からない。

「……あのよ」

「うん？」

「……オレ、オメーの笑ってる顔が好きだ」

「急に改まっちゃってどうしたの？ やっぱり熱」

「熱なんかねーよ。本当にそう思ってる。だから、蘭にはこれから
もずっとそうやって笑って欲しいんだ」

心から出た言葉に、蘭は今日一番と言えるくらい顔を真っ赤にしている。

彼女もこの手の言葉には慣れていない。「ずっと」の言葉の意味を探ってみたり、彼の本心がどんなものなのかを考えてみたりした。彼も彼女に言いたいことは言えたのだけれど、ここからどうすればいいかは全く考えていなかった。

そんなこんなで数秒間二人の間に沈黙が流れたのち、蘭が先に口を開いた。

「……うん。新一も、もうどこにもいなくならないでね」

それから何も言わないままで、蘭は右手を新一の服へと持って行き、その裾をそっと掴んだ。

上手く言葉を繋げることが出来なかった。伝えたいことは数え切れないくらい、まさに、言葉には出来ないくらいあるのに。

彼女に負けないくらい顔を真っ赤にし、少し間を置いてから頷いた。

おもむろに空いている左手を彼女の右肩に置き、そしてさりげなく顔を近づける。彼が何をしようとしているかは彼女にもすぐに分かった。心臓の脈打つ音が段々大きくなっていく。

お互いの影が重なり合いそうになった時　二人は図らずとも数秒間じっと目を合わせてしまい、同時に吹き出した。

新一はぱっと蘭から離れ、彼女のいる逆側にある空を見ながら言う。

「……オメー、何で目開けたままなんだよ。普通は、目閉じるモン

「だろ？」

「そ、それは新一だって同じでしょ？」

「……やっぱ、こういうのは……慣れねーや」

「と、とにかく……行こっか。映画始まっちゃっし」

「お、おう。そうだな……」

再び二人は歩き出す。

ゆっくりでもいい。自分たちは自分たちらしく進んでいけばいい。
二人してそんなことを思っていた。

story・2 また あした(後書き)

story・2、いかがでしたか？

今回の話は、story・1とは百八十度違った幸せなラブコメものです。

結果的には第二話「以降に」って言うまでもなく普通にアップしました。

目次を見ると異質な二つの話が並ぶ形になって、連続して読むと違和感が生じるかと思われます(というか、作者の私が一番気にしているんですが)。と言いつつ、これからも時間と云ふものを一切無視した構成になってしまふことでしょう。くだいようですがその辺りの突っ込みは勘弁してください。

で、今回は新一視点よりの三人称にしてみました。

曲を聴いたとき、蘭 新一というよりも新一 蘭っばいかな?と思つたので。

前に書いた拙作たちとかなり被っている気が……既視感が半端ない……。

こういう新蘭の日常を切り取って書くのが好きなんです(言い訳)。恋に奥手だけどお互いをちゃんと大切に思い合っているところがどストライクです。

さりげない仕草や気持ちの動きから滲み出る相手への思い……的なものを表現したつもりではありますが。

なかなか上手くはいかないものですね。難しい!

ここまで読んでくださってありがとうございます!

何かご意見、感想等ありましたら遠慮なく書いていってください! 泣いて喜びます。

【参考にした曲】 Every Little Thing「また

あした
「

story 3 薄荷キャンディー (前書き)

- ・登場人物 新一、蘭
- ・傾向(?) 普通のラブコメ

story 3 薄荷キャンディー

遠くに波の音が聞こえる。

ざざ、といつてから、暫くしてからまた違う音を奏でる。

ここは、海岸を眺めることの出来る高台にある、優作の別荘である。

新一が生まれる少し前に優作が買ったものだが、家族で来たことは一、二回しかない。

外壁は白で統一されており、あまり使われていないこともあって、傷みは少ない（海風の影響の割には）。

今日は新一が蘭を誘い出し、この別荘にやってきた。

昼から夕方にかけては海で泳いだり水遊びをしたりして時間を潰した。

何か急かされる目的も特にはないから、二人でのんびりと過ごすことが出来る。

新一は椅子から立ち上がると、デッキに出られる大きなガラス戸を開き、その向こうを眺めた。

夕日がすっかり沈みきった海はただの黒と化し、まるで自分を死の世界へ誘っているみたいだ。

一日の内にここまで姿を変えるものか、と海を見るたび思う。海が特別好きだという訳ではないのだけれど、不思議な魅力があると思う。

サンダルを足に引っ掛け、デッキに出て手すりに両肘を乗せた。少し蒸し暑い。けれど、時折吹く海風が心地よかった。

「この別荘、波の音がよく聞こえるよね」

突然後ろから聞こえた蘭の声にゆっくり振り向く。
彼の隣に並んでから彼女は言葉を続けた。

「デッキからは海を一望出来るし」

「そうだな。ここ、よく父さんと母さんが来てたらしーぜ」

「本当、素敵なところね。来てよかった……ありがとね新一」

「どういたしまして」

そう言っただけで少しおどけてみせる。蘭は、普段はかっこつけている新一が素直に笑う瞬間が好きだった。まるで少年みたいに笑ってみせる彼自身のこと。

でも、と、昼間のことを思い出しながら言った。

「海で遊んでる時、他の女の子たちを見てたでしょ」

「バー口。無駄に広がって遊んでたから、ちよつと邪魔だなんて思っただけだよ。オメー、もしかして妬いてるのか？」

「バ、バカね！」

そんな訳ないでしょ、と併せて言うのは、蘭にとって新一の言葉が凶星だったからであって。

彼曰く「邪魔だなあ」と思っていた女の子たちは、スタイルがよく、皆可愛かった。

新一があんまり女の子に対して興味を示さないのは知っているが、少しムツとしたのは事実だった。

「オレはオメーが妬いてくれて嬉しいけどな」

「なっ、何言ってるのよ。だから妬いてないって言ってるでしょっ」

「もしオメーが他の男を見てたら、間違いなくオレはそいつに妬くぜ」

顔を赤くしている蘭を尻目に、さらりと気障なことを言うてのける。

自分で狙って気障なことを言うているつもりはない。ただ、思っていることをそのまま言うてみせただけだ。

蘭は、無自覚気障男にバカという言葉をもう何個か浴びせる。照れ隠し、というのが正しい気持ちだ。それから思い出したかのように話題を変えた。

「そうそう、これ知ってる？」

と言うて蘭がポケットから取り出し、新一に見せたものは。

「薄荷飴……？」

「そうよ。さつき、海からこつちに来る途中、ちよつと駄菓子屋に寄ったじゃない？　そこでお店の人に勧められたの」

透明なビニール袋の中に、二粒の薄荷飴が入っていた。表示には「海の駄菓子屋名物・薄荷飴」とある。

（二人が寄った駄菓子屋の名前が「海の駄菓子屋」というものである）

そのままじゃねーかと内心突っ込みつつ、その存在には覚えがなかった。

小さい頃の記憶を辿ってみても、名前すら聞いたことがない。

今日の夕方、二人は海岸の近くに駄菓子屋があるのを見つけた。

蘭は懐かしいと言うて、新一が言葉をかける間も与えないくらいすぐに店へと入っていった。

新一は駄菓子にはあまり興味がなかったから、外で待っていたのだけれど。

店の中で店主と思しき人と何かの話で盛り上がっているのが見えたのだった。成る程、この飴のことか、と今納得した。

駄菓子屋を出てから、蘭に何の話をしてたのか聞いたものの、後で言つて教えてくれなかったから。

「んで？ この飴、食べると何かあんのか？」

「夜、あの海を見ながらこの飴を恋人が二人一緒に食べると、その二人は永遠に結ばれるんだって。あの海に来たカップルは皆買つてくつて言つてたよ」

顔をほんのり赤く染めながら蘭は言う。

オメーはそういうの好きだもんな、と彼女の横顔を見ながら思った。ちよつと胡散臭いような気がしないでもないが、嬉しそうにしている蘭に水を差したくはない。

彼女から袋を受け取つて、部屋から漏れる明かりに透かしてみる。

特に変わつたところはやっぱりなさそうだが……と、突つ込みたい気持ちを抑え、蘭に袋を返した。

蘭は受け取るとすぐに薄荷飴の袋を開けて、一粒取り出した。

「……はい、コレ」

蘭と彼女の持つ飴を何度か見比べてから、右手を広げ、その手のひらの上に飴を乗せてもらった。

彼女も袋に残っていた一粒を取り出す。

「恋人が永遠に結ばれる飴ねえ……」

そう言つて飴を親指と人差し指で掴み、色んな角度から眺めた。やっぱり新一、こつというのはあんまり好きじゃないよね……そう蘭はすぐに思った。

少し考え込んでいる新一に、悪いと思つて謝る。

もし食べたくないなら返してもらつても別にいいし、とまで考えて

いた。

違う違う、そうじゃなくてさ、とその蘭に新一は続けた。

「別にこういうのがなくても、オレは蘭の傍にずっといるつもりだからさ」

「えっ？ ……それってプ」

「まあまあそれはいいから！ 早く食べようぜ」

思わずプロポーズじみた言葉を言ってしまったと気づいたのは、蘭の反応を見てからだった。

自分の顔が熱くなっていくのが分かる。蘭が照れているのを見るのは好きだけれど、自分が見られるのはちよつと言うのもあるし。こんなさらつと言うのじゃなくて、彼女に結婚を申し込む時はもっとちゃんとした形で……と思っているからである。

普段鍛えているせいか、回転の速い頭はつい色々なことを考え過ぎてしまう。

あたふたしている新一を見て、蘭はくすりと笑った。

「じゃあ、食べよつか」

「ん」

口の中に放り込んだ瞬間、薄荷の独特な味が広がっていった。

それと同時に、心の中にも何か暖かくやさしい気持ちが増える。と二人して思ったまでは良かったが。

「甘っ……」

普段甘い物を殆ど食べない新一は、夢想じみた世界からすぐに現実へと引き戻された。

「そう？ 丁度いい甘さだと思っけど……あっ
「？」

飴を口内で転がしていたところ、蘭は飴の入っていた袋に書いてあった言葉を今更ながら発見した。

そのの書いてあるところを指差して、新一にも見せた。

「海の駄菓子屋名物・薄荷飴」という商品名が記載されている、真下にそれはあった。

「恋の味がする飴？」

やっぱりこの飴はうさんくせいな、と改めて思いなおしたのだった。

「この飴、本当にカップルが買ってくのか……？」

思わず本音をこぼした新一に、蘭は少し唇を尖らせて言う。

「本当なんだって！ あのお店の人言ってたよ。飴を売り始めてちよつと経った頃、わざわざ報告しに来た人たちがいたんだって」

「ハハハ……どうかねえ」

「もう、新一ったらそういうことは昔っから信じないんだから」

「探偵たるもの、噂とか夢とかに振り回されてちゃやってらんないんでね」

「それはそうだろうけど……少しくらいロマンチックなことも信じてみればいいのに」

蘭はそう言って頬を膨らませた。そんな彼女が愛おしくなって、思わず笑みをこぼした。

突然笑顔を浮かべた彼を、蘭は半ば呆れたような、不思議そうに思

っている顔で見ている。

急に笑い出したり、かと思っただら怒ったり泣いたり。

新一は、そんな風にコロコロと表情を変える蘭が好きだ。

普段はとても可愛らしいのに、ひ弱じゃない。かわいこぶることも絶対しない。とても芯のある性格だ。

これからも彼女と時間を分かち合おうと思う。

潮の匂いを含んだ海風が、時折二人を包む。
その中に、微かに薄荷の匂いがした。

story 3 薄荷キャンディー（後書き）

約一ヶ月ぶりの更新です。書きたい話はたくさんあるんですが、何分この頃は忙しいもので。と言っても結局言い訳にしか聞こえないので、前置きはこの辺にしておいて。

今回の話はいかがでしたか？ ぼちぼち新蘭モノじゃない奴を入れようかなあと思っただけなんです。まあ「新蘭メイン」とあらずじにも書いておいたのでヨシとします（オイ）。

次こそは！ 新蘭モノじゃない話を書こうと思います。次の更新がいつになるかは未定ですが……

今回参考にした曲は前から好きだったんですが、最近改めて聴いたらモロ新蘭だ！ と思ひまして、一気に書き上げました。もし気になった方がいらっしゃったら是非聴いてみて下さいね。

【参考にした曲】 K i n k i K i d s 「薄荷キャンディー」

story・4 らいおんハート(前書き)

- ・登場人物 コナン、蘭
- ・傾向 ややしリアス？

story・4 らいおんハート

朝から小五郎が事件の調査で出かけている、とある金曜日の夜。

コナンは、たった一人いないだけで家の中はとても静かになるもんだなあとしみじみ思っていた。

金曜日の夜と言えば、小五郎がいつも以上にビールを飲んで酔いつぶれている時だ。

あまりに「もう一杯」と何度も頼むもんだから、蘭もしまいには彼を怒るのである。

そんな彼女に小五郎も頭が上がらない。高校二年生にして、彼女は既に立派な主婦だ。

コナンは彼女を見ながら、自分ともし結婚したらどんな生活を送るだろう？ と夢想することもたまにある。

コナンにとって、金曜の夜にゆっくり湯船に浸かる時こそ、一週間の疲れが癒される瞬間だ。

そんなに長く入浴しているわけではないのだけれど。

いつものようにさっと入浴を済ませ、パジャマを着、タオルを首にかけた。

風呂場を出て廊下を歩き、リビングに入ったところ。時計の針は九時半ちょうどを指していた。

机に肘を寄せ、テレビを見ている背中にコナンは言った。

「蘭姉ちゃん、お風呂空いたよ」

「ありがとう、あともうちよっとしたら入るよ」

振り返ってそれだけ言うと、蘭はまたテレビ画面に視線を戻した。

そう言えば、今日はあのドラマがある日だったっけ。

蘭は普段はそこまでテレビ好きではないが、あるドラマにこの頃嵌

っている。

「IS THERE " A LOVE " BETWEEN YOU
AND ME?」

それが、そのドラマのタイトルらしい。

コナンは、今高校生を中心とした女性たちの中で小さなブームを生んでいる、と夕方のニュースで特集していたのだけは覚えていた。その内容についてはほとんど知らない。タイトルからしてラブストーリーだとは想像がつくが。

そもそもラブコメものには興味がないから、内容を聞いてもすぐに忘れてしまうだろうと思っている。

コナンは特にすることもないので、蘭の合い向かいに座り、ドラマを何となく見始めた。

「あら、コナン君もこういうドラマに興味あるの?」

「いや、どんな話なのかなあって」

「コナン君にはまだちょっと分からないかもよ?」

「そうかなあ……ハハハ」

「まったく、ガキ扱いしやがって……と内心毒づく。とは言え、実際に見かけは子供だから反論のしようもない。

反論でもしようものなら、大人ぶっちゃってと窘められるか、色々都合の悪いことを言及されてしまうかのどちらかだ。

「で、どういう話なの?」

「えっとね、主人公は高校二年生の女の子だね。幼馴染でずっと昔から一緒にいる同級生の男の子に片思いしてる話」

へえ、と言いつつも、どっかで聞いたことがある状況のような……とコナンは思った。

「でもそれだけじゃなくてね。主人公の女の子　美沙が、ある日に片想いしてる男の子　浩介に告白したの。その日は、浩介は返事せずに帰っちゃって。そしたら、次の日から浩介がいなくなっちゃって。学校にも来ないし、連絡もつかないし。美沙が何度電話しても電源が切られていて」

「それで、その浩介って人は結局見つかったの？」

「今日の八話で、街の中で美沙が浩介を見つuckerみたいよ。ホラ、これから始まるみたい」

やっぱりオレたちの状況に似てるんじゃないか。

遠まわしに攻められているみたいで、コナンは苦笑するしかなかった。

蘭との話を中断して、ドラマの次々進んでいくシーンに目をやった。

ちょうど、主人公・美沙らしき人物が街を友人と歩いているシーンだった。

彼女たちは学校帰りに買い物をしているようだ。

『それでね、由紀……』（由紀は、友人の名前らしい）

『あれ？　あの男の子って浩介君に似てない？』

『えっ、どこどこ！？　……あっ』

美沙が探していた浩介は、髪を巻いたとても綺麗な女の人と歩いていた。

ちょうどあと数百メートルで、すれ違いそうである。

美沙はシヨックを受けながらも、何とか浩介に話しかけようとするが。

『浩す……』

『でね浩介君、この前凄くビックリしたことがあったの!』

『ん、何だよ？ またどうせそんなにビックリするような話じゃないんだろ?』

『あのねえ……この話は本当にビックリしたんだからっ』

二人はとても楽しそうに歩いていたから、美沙は浩介を引き止めることが出来なかった。

本当に、お似合いだった。友人の由紀の言葉も美沙の耳には入らない。

コナンはちらり、と蘭の表情を盗み見た。

その表情がどんな感情を含んでいるかを知る前に、彼は蘭と視線が合った。

彼女は何かを隠すように、ふわりと笑う。笑っているのにまるで泣いているようだった。

「……蘭姉ちゃ」

「新一も、綺麗な彼女とか作ってるかもね？ アイツ、あーんなしようなない推理オタクだけど、女の子から結構ラブレターとか貰ってたし」

「そんなことないよ。新一兄ちゃんは……確かに推理オタクだけど、蘭姉ちゃんを放つといて彼女を作るような人じゃない」

「分からないよ？ わたしと新一はただの幼馴染だもの。新一がしたいことに、口出しなんてしないよ。……したくても、出来ないよ」

蘭の、本心からの言葉はいつだって、コナンの心を大きく揺さぶる。

違う、オレはオメーのことを……口から出かけて、何とか止めた。いっそ伝えてしまいたい。

そうすれば蘭も少しは安心することが出来るかもしれない、と思った。

しかし今の自分に彼女を安心させてやる資格がないことを、コナンは痛感していた。

彼女を組織と関わらせてはいけない。その思いだけがコナンの理性を繋ぎとめていた。

自分の両手では彼女を抱きしめてやることも出来ない。

何も出来ないくせに、彼女なら自分をずっと待っていてくれる、と自惚れている自分に腹が立つ。

「新一兄ちゃんは『事件で忙しい』って言ってるんでしょ？ 新一

兄ちゃんが嘘なんかつくわけじゃない」

「事件か……そうね。新一、確かに嘘は昔からあんまりつかないかも」

「そうだよ」

きっぱり言いながらも、コナンは自覚していた。こうするたびに自分はまた一つ嘘を重ねてゆくことを。

「嘘なんかつくわけない」という言葉が既に偽りであるから。

これまでも何度も自分は彼女に嘘をついてきた。あと何回自分は彼女を騙し続けるのだろうか。

そう考えると、見えない何かに押しつぶされそうになる。

ふう、と一息ついて蘭は言う。

「わたし、いつもコナン君に愚痴言っただけだよ。ごめんね」

「蘭姉ちゃんは謝らないで」

「えっ……どうして？」

「そういうことは、新一兄ちゃんに直接言っちゃえばいいんだよ。

そうでもしないと、新一兄ちゃん、懲りないから。いつも事件のことばかり考えてて、蘭姉ちゃんが待っていてくれることに甘えてる

んだから」

コナンは、自分に言い聞かせるように言っていた。自分にとって痛い言葉を直接言われているのは事実だ。ただ、蘭にとっては違う。

蘭が本心を「新一」に吐露しようがしまいが、すぐに戻ってこられる訳ではないけれど。

彼女は、コナンの言葉を聞いてから、少し時間を置いて再び微笑んで言った。

「言えないよ」不思議そうな表情を浮かべたコナンに、蘭は続ける。「アイツ、事件を解決するために頑張ってるんだもん。……わたしは新一に待っててって言われたから、帰ってくるまでは待つのに」

どうして彼女はこんなに強いのだろう。

コナンはいつも疑問に思う。誰が、何がこんなに彼女を強くしているのだろうか。

そして、蘭の言葉はいつも自分を癒してくれる。彼女がいるからこそ自分は頑張れる。

「彼女がいてもいなくてもね」

「新一兄ちゃんには……っ」

オレには、オメー以外の女なんて考えられないんだよ！

言ってしまった。けれど、言葉を必死に飲み込む。蘭の言葉を完全否定できない自分が悔しい。

両手の拳を強く握り締めながら、コナンは振り絞るように言った。

「……新一兄ちゃんが帰ってくるまでは、僕が蘭姉ちゃんのそばにいるよ」

「ありがと。何かコナン君ってさ、わたしよりも新一のこと知ってるみたいだね」

「えっ？ 僕は、新一兄ちゃんならこう思ってるかなあって……」

蘭はコナンの言葉にふわりと微笑んだ。

きつと彼女は、少しませた子供の戯れ言だと思っているだろう。

けど、オレにとっては堅く強い決意だ。

彼女の笑顔を、彼女の全てを守るために。オレは生まれてきたんだ。自惚れかも知れない。けれど、彼女が自分^{コナン}を拒否するまでは、絶対にそばにしよう。

そばにいる間は、彼女が失ったもの全てを、自分^{コナン}が埋めよう。

「あ、ドラマ、いつの間にか終わっちゃったね。もう十時だから寝なきゃダメよ？」

「はあい」

一人の少年の小さな決意は、彼の胸の奥にそっと仕舞われた。

今日もまた、いつものように夜は過ぎて行く。

story・4 らいおんハート（後書き）

次こそは新蘭じゃないものを！

と宣言していたので、コ蘭にしてみました（オイ）。

と言うか、コ蘭モノってこんな感じでいいんでしょうか……結局新蘭になっているような気がするのは私だけではないと思います。

少年探偵団モノとか平和とかも書いてみたいと思いつながらも、ネタが思い浮かばん……というか、書き進められん……。中途半端になっちゃってます。

ということ、結局新蘭モノばかり書いてます。……ハイ、言い訳です。

今後、どこかで新蘭じゃないモノは入れるつもりではいますので……。

【参考にした曲】SMAP「らいおんハート」

story・5 Double Rainbow (前書き)

- ・登場人物 コナン、蘭、阿笠博士、哀
- ・傾向 ややしリアス
- ・備考 この話は組織の壊滅直後という設定で、蘭の一人称です。

Story 5 Double Rainbow

「こんなに近くにいてくれたんだね」

わたしは、机の上に置いてある写真立てを持って見つめる。

新一と一緒に行ったトロピカルランドで撮った、ツーショットの写真。

写真の中で新一はあの生意気な笑顔を浮かべている。

この頃連絡が取れなかったから、もう会えないんじゃないかななんて思ってた。

「きっかけ」は、つい数時間前の出来事だ。

本当、今日は熱帯夜って言葉がぴったりね。湿気がありすぎて何だか息苦しい気もするなあ。

昼間は最高気温が三十五度だったみたいだけど、まるでまだそれが残ってるみたいね。

携帯を見ると午後八時半を過ぎていた。ヤバイ、早く帰らなきゃ。少し早足で歩こう。

園子と買い物をしたついでに、晩御飯も一緒に食べちゃったから、予定していたよりも遅くなっちゃった。

空いている片手で顔を扇ぐ。何でこんなに暑いんだろう、信じられない！ 暑くて嫌になっちゃっ……

お父さんとコナン君には、今日は遅くなるかもしれないからポアロでご飯食べてね、と言っておいたし、そんなに急ぐ必要はないけど。あんまりお父さんを心配させちゃダメだし。……あれ、電話だ。お父さんからかな？

『おう、蘭か？』

「あ、お父さん。ゴメン、もうすぐ帰るから」

『ところで、あのガキがまだ戻ってこねえんだが、蘭は何か聞いているか？』

「コナン君？ ううん、何も聞いてないけど……」

『ったく。あのガキ、こんな時間までどこほつつき歩いてんだあ？』

そう言えばコナン君、今日は博士の家に行くって言って朝早く出かけたんだっけ。

コナン君、いつもはこの時間までには帰ってくるのにな。

また危ない目にあってなきやいいけど……

お父さんも「あのガキ」なんて言ってるけど、心配してるのかな？

「じゃあ、わたし、もう少しで博士の家の近く通るから寄ってみるよ」

『もしいたら、ちゃんと連れて帰ってこいよ』

「うん。じゃあね」

もう少しっていうか、もう博士の家目の前だし……。よし、電気はついてる。誰もいない、ってことはなさそう。

でも歩美ちゃんたちの声は聞こえない。何かすっごく静かだし、やっぱり誰もいないのかなあ。

とりあえずチャイムを押しちゃえば分かるか……。あれ？ あそこの窓、ちょっと開いちゃってる。

しかも、何か話し声も聞こえるし……。ちょっと入っちゃおうかな。何か気になる。

悪いとは思っけど……。窓の下に隠れてれば見つからないよね。

この声……。コナン君と、哀ちゃんと、博士のよね？

「……だから、いいだろ？ もうアイツらも全部ぶっ潰したことだしよ」

「バカね。油断は禁物よ。まだ残党がいるかもしれないし、下手したら彼女を巻き込んでしまうことにもなるわ」

「そりゃそうだけどよ……」

「君の気持ちも分かるが、ワシももう少し時間を置いてからの方がいいと思うぞ」

何の話、してるんだらう。ゲームの話かなあ。全然分からない。気のせいかもしれないけど、何かコナン君も哀ちゃんも普段と話し方が違うような。

まるで小学生じゃないような……って、そんな訳ないか。

でも、やっぱり何の話してるか気になる。もう少しだけ聞いてみよう……盗み聞きって悪いことだけど。

「早く元に戻りたいのも分かるけど、もう少し冷静になりなさいよ。ちよっとした自惚れが命取りになるのよ」

「自惚れてなんかねーって。てか、冷静になれつつあったって、もうすぐにも戻るっつーのに待てっかよ」

「まあまあ、哀君の言う通りじゃ。もっと落ち着くんじゃ、新一君」

え。し、んいち　？　どういうこと？　新一の声なんか聞こえないよね？

じゃあ、まさか……？

「……わあったよ」

コナン君が新一？

そりゃあ、何回も疑ったことはあるけど……嘘でしょ？

「やっと分かったようね。ところで、時間平気なの？ もう八時半過ぎてるわよ」

「げ、マジで。早く帰らねーと！」

「愛しの彼女が待つてるものね」

「愛しって……蘭は今日園子と買い物に行くっつってたから、待つてるかどうかは分かんねーけどな」

とりあえず、門の外に出よう。何のことを話してたかはよく分からないけど、聞いちゃいけないそうだし……

門の戸を開いて、道路に出る。今にも体から力が抜けて、しゃがみこんじゃいそう。

何をどう考えていいのか分からない……。

「あれ、蘭姉ちゃん！？ どうしたの、何か博士に用事とかあったの？」

玄関から彼が出て来た。すごい焦ってる。

わたしにさっきの話、聞かれたかと思ってるのかな。

何でそんな子供「っぽい」言い方するの？

よくよく考えてみれば、彼はいつも「大人が子供を真似たような」喋り方をしていたような気がする。

「うっん。ちょうど近くで園子と別れてきたところなの」

「そうなんだ……あのさ、蘭姉ちゃん」

思いつめたような顔してる。あなたは今、何を考えているの？

直接聞いちゃいたいけど、言っちゃいけないような気がする。

何も知らない振りをしなきゃ……

「なーに？」

「……うつん、何でもない」
「そう。じゃあ、帰ろっか」

いつものように「コナン君」の手を握る。

こんな他愛ないことも全部、自然には出来なくなっちゃうような……
今まで何とかバランスを保っていたモノが壊れていくような、そんな気がする。

それから家に着くまで色んな話をした。何でもないような話。
あなたはやっぱり「コナン君」のままね。さつき哀ちゃんや博士と話してた時の口調とは違う。

まだちよつと混乱しちやってるから、どうしてあんなに小さくなったのか、とかはあんまり考えられないけど。
もし本当にそうなら、小さくなっちゃってることも何か夢みた
いな話だけど、多分言えない何かがあるんだろうな。

家に着いて、「コナン君」はお父さんにちよつと怒られて。小学
生らしいおどけた謝り方もしてて。

お父さんがポアロのマスターに頼んでくれて、「コナン君」の分は
作ってもらえた。
リビングでご飯を食べてるコナン君から離れて、わたしは部屋に行
った。

今だけは誰とも話したくないから、ドアは閉めておこう。

電気をつけると、すぐあの写真が目に入ってくる。

新一。あなたはずっとわたしのそばにいて、何を思っていたの？

何も気づかなかつたり、泣いたりしてるわたしを見て、バカだなあ
って呆れてたの？

どうしてわたしに何も言ってくれないの？

色々あったよね。本当に、色んなことが。

あなたにはいっぱい言いたいことがあるよ。いっぱいありすぎて、
どうにも出来ないくらい。

だけど、一つだけ分かったよ。

「こんなに近くにいてくれたんだね」

ずっとそばにいてくれたんだね……。

寝つけない。もう夜中の二時じゃない。暑いせいもあるのかな。
色々考えちゃって、ダメだ。水、飲んでこよう。

部屋の扉を開けると、台所の明かりだけがついてるのが分かつた。

消し忘れた記憶はないし、お父さんが起きて水でも飲んでるのかな？
ゆっくり歩いていくと、明かりの中に小さな影を見つけた。

丁度、ガラスのコップに入れた水を飲み終わったところのようだ。

「蘭姉ちゃんも起きてたの？」

「うん。今度試験があるから、その勉強しててね」

なーんて嘘を言ってみる。試験が近いのは確かだけれど、その勉強が遅くまで起きている直接の理由って訳じゃない。

「コナン君」は何でこんな時間まで起きてるんだろ。小学生なら絶対寝てなきゃいけない時間。

あ、別に小学生じゃないんだったら別に問題ないのかな。って、そんな問題じゃないか……

「あんまり無理しすぎちゃ体に悪いよ？」

「心配してくれてありがとう。コナン君こそ、どうして起きてたの？」

「ちよっと暑くて寝られなかったんだ」

やっぱり小学生らしくないな。見てれば見るほど違和感があるように思えてくる。

もしかしたら、「コナン君」も色々考えててこんな時間になってたとか。

ちゃんとわたし、何も無いふり出来てるかな。今にもあなたに聞いちゃいそうだよ。

あなたは、新一なの？ って。

だめだ。ちよっと一回、外の空気を吸って落ち着こう。「コナン君」も誘おう。

「ね、ちよっと屋上に行かない？」

「……ウン」

あなたは柵に捕まって、わたしはその柵の上に手を乗せる。
何から話せばいいか分からないから、とりあえず夜空を見上げた。

「あ、星が見える。綺麗だね、さっきまで雷凄かったのに、何もなかったみたい」

「蘭姉ちゃん、ずっと怖い怖いって言ってたもんね」

「怖いものは怖いの！」

笑いながらも、あなたはさっきからずっと身構えている。いつわたしが核心に触れるか、考えているのね。

薄暗い中でも、眼鏡の向こう側にあるあなたの目は見える。ほんの少しだけ憂いを帯びている。

じっと見つめていたら吸い込まれてしまいそうな、ネイビーブルーの瞳。

「蘭、姉ちゃん」あなたは、何かを決心したかのような口ぶりで話し始める。

「さっき、博士の家の近くにいた時……僕が話してる声、聞こえた？」

「どうして？ 何かわたしが聞いちゃいけないような話でもしたの？」

そう言ったら、あなたは黙り込んでしまった。ごめんなさい。あなたを苛めたい訳じゃないの。

追い詰めるようなことをしてるつもりもないの。

ただわたしは、あなたの口から本当のことが聞きたいだけなんだ。

「やっぱり、聞いてた……んだよね」

あなたの口調が変わったのは、すぐに分かった。そんなにわたし、怖い顔してたかな。

諦めたようにフツと笑みをこぼしたあなたに、わたしは数秒遅れて小さく頷いた。

「ごめんなさい」

「謝んなよ。元々、こうなっちゃったオレが悪いんだからよ」

「……わたし、あなたが全部話してくれるまで何も聞かない。それまでは何も知らないふりするから。だから……どこにも行かないで」

間接的ではあるけど、あなたはわたしに本当のことを言ったから、どこかにいなくなっちゃいそうに思えた。

本当にひとりになっちゃうって考えたら、怖くなって。あなたを困らせるようなこと言っちゃったみたいだね。

あなたは目を見開いて、驚いたような顔をしてる。

あなたを困らせたり、あなたの足手まといになったりするだけじゃなくて、わたしにも何かが出来たらいいのに。

「分かった」少し時間を置いてから、あなたは静かに言った。

「……またちよつとの間、待たせちまうけど」

「いいの。『本当に』帰ってきたら、色々と聞かせてもらうんだからね。覚悟しなさいよ」

そう言ってわたしが手すりを強く握り締めると、あなたは少し後ずさりをした。

今はこんなことを言ってるけど、本当に会えたら、ちゃんと「おかえりなさい」って言うつもり。

わたしの胸の奥に悶^{つか}えていたものはなくなって、心の中は透き通っていた。

まるで、雨が降った後に虹の架かっている真つ青な空のように清々しい。

どうかあなたの心の中も、わたしと同じでありますように。

story・5 Double Rainbow（後書き）

何を思ったか今日は二話連続投稿。

今回は一人称にしてみました。story・4ではコナン（新一）の視点よりだったから、というのもあって今度は蘭よりにしてみようと思ったのが最初で。蘭の心の動きを表現するなら一人称だと思って挑戦してみました。

と、挑戦してみたまでは良かったものの、やっぱり一人称は難しかったです……。

【参考にした曲】倉木麻衣「Double Rainbow」

story・6 HANABI(前書き)

- ・登場人物 新一、蘭
- ・傾向 ややしリアス

夜遅くに新一は事件の現場から帰ってきて、外に比べれば若干暖かい家の中に入った。

誰もいないし当然暖房もついていないのだから、少し慣れてくればやっぱり寒かった。

今日はいつも以上に寒いなと思いつつファンヒーターの電源を入れる。

ふと窓の外を見てみると、風がゴオゴオと暴れていた。雪とか降んなきゃいいけどな、と呟く。

朝起きた時の雪かきが面倒だからだ。

コートを脱ぎ、そのままソファの上に投げた。スーツのジャケットはそれとは対照的にちゃんとハンガーにかける。

そのまま流れるように台所へ行き、ヤカンに水を入れ、その水を電気ポットに注ぎ込んだ。

彼は「普段」と同じように過ごしていた。

台所を出て、机の上に置きっぱなしである今日の新聞に初めて目をやる。

朝急いでいたから見出しすらもきちんと読んでいなかった。

一枚めくると、そこには自分の写真が大きく載っていた。

それを見ながら、新一は、この前解決した事件の内容や事実関係をぼんやりと思い出していた。

いいものではない。確かに、トリックなどの分からなかったことが解ければうれしいけれど。

その嬉しさと言うのは一過性のものであり、事件そのものの存在は嫌だ。

負の感情が絡み合った果てに起こってしまった悲劇。

解決するたびに、こんな悲しいことはこれで最後になればいいの
と思う。

しかしながら、またこうして事件解決のために呼ばれる自分がある。
無力だ、と思う。目の前に置かれる事件を解決することは出来る
のに、それを防げない自分がかかるから。

どうすればいいんだ？

悩んでみたところで、自分には解決という手立てしかない気づく。
こんな時だからこそ、以前怪盗キッドに言われた一言を思い出し
てしまう。

「探偵はただの批評家に過ぎない」

『いつも』と同じ時間に、携帯が着信を知らせた。

蘭だ。

今担当している事件を解決するために、新一は山形県にいる。

ウィークリーマンションを借りて独りで生活しているのだ。（一人
暮らしには慣れてるから、寂しいという感情はなかった）

この事件が終わるまでは、東京に帰れない。彼女とも会えないのだ。
彼女は「山形の観光がしたい」と何度も言っていた。しかし新一
は、彼女には来るなど言っていない。

万が一のことを考えているから 要するに、事件には彼女を巻き
込みたくないからだ。

コナンだった頃には何度も危険な目に遭わせてしまった。不甲斐な
い自分が何度も嫌になった。

だけど今は新一の姿でいる。自分が絶対に彼女を守る、守り通して
みせる。

そんなことを思っていた。

何コールかしたのち、電話に出た。

「おう、蘭か」

『うん。風邪』

「には気をつけてねー、だろ？わーってるって」

『だって、心配なんだもん。東北地方、今年は特に寒いってさっきのニュースで言ってたもの』

「大丈夫だって。もう二週間もいるんだし、慣れたよ」

新一は、どんなに救いようのない無力感にまみれていても、蘭の声を聞くと暖かな気持ちになれる。

それはきつと彼女が、汚れを知らない純粹さの象徴のようなものだからであろう。

彼女がいるから、彼女と話すことが出来るから、何とか自分はやる気を喪失せずにいられると思う。

『新一、元気ない』

「……………そうか？」

『うん。毎日声聞いてるもん、分かるよ』

コイツには隠せねーな。

そんなことを思って、新一は思い切って自分の考え事を吐露した。事件を解決できると嬉しい。でも、結局のところ自分は事件そのものの発生を抑えることは出来ないのだと。

自分がしていることは過去の処理であり 自分は無力だ、と感じていることを。

数秒の沈黙の後、蘭から会話が再開された。

『何か、新一らしくないね？』

「ん……………そーか？」

『うん』

自分らしいって何だろう？ 新一は、そんなことまで考えるようになっていた。

行き場のない無力感を味わって、自分が今なんでここにいるのだろうかまでも思い始める。

この事件を解決しても、また新しく悲劇は起こり 自分が呼ばれたら、その悲劇を終わらせる。

それでも、また 同じことの繰り返しじゃないか。

自分が解決しようがしまいが、悲劇は止むことはない。どうすれば止むことができるのかと考えるのではない。

やってもやらなくても結果的に変わらないならば、いっそ

言葉を言いかけたとき、蘭が口を開いた。

『だって、いつもの新一は自信満々で立ち振る舞ってて、弱いところなんか絶対に見せないじゃない』

「見せないんじゃないよ」

『……えっ？』

「……見せられないだけだ」

そう。自分は弱い。弱いのを相手に悟られたくないから、強がって自信満々なフリをする。

しかし今は無力感によって、フリをする気も失われている。

蘭にはいつも弱いところなど見せない。蘭だけでなく、ほとんど弱音を吐くことはない。

弱音を吐く前に、自分がどうするべきか、頭が働いて勝手に答えを導いてしまうから。

それに、弱みを他人に見せる勇気がないのも事実である。

『大丈夫よ』

「……蘭」

『事件のことも、弱みを見せられないってことも』

今は、蘭の言葉だけが、孤独の淵から救い出してくれる綱になっている。

新一は、電話に静かに耳を傾けた。

『事件を止められないっていうのは、新一ひとりが抱えることじゃないよ。新一のせいじゃないんだもの。それに、新一が事件を解決すること、ちゃんと依頼人の手助けになってるじゃない。安心するだけじゃなくて、悲しくなったり、辛くなったりもするけど……でも、一歩も進んでないわけじゃないんだから』

「そう……だな」

『どうせ推理オタクの新一のことだから、探偵以外の仕事をして生きていくことなんて出来ないでしょ？』

「どうせって何だよ……まあ、その通りだけどな」

くすくすと笑いながら言う蘭に、思わずこっちも笑ってしまう。

『弱みも……見せられないって言ったって、今さっきわたしには言ってくれたじゃない。わたしは、全部教えてほしいとは思わない。けど、全部抱え込もうとは思わないでね？ わたしでいいなら、少しでもいいから言っ。いいアドバイスは出来ないかもしれないけど、聞いてあげることならできるから。わたしは……新一に笑ってほしいから』

蘭の言葉が全身に染み入っていくように響く。

それとほぼ同時に、自分の中にあった負の感情がゆっくりと消え始めた。

「……ありがとな」

『どづいたしまして』

受話器の向こうで冗談ぽく言う蘭が、無性にいとおしくなった。さっきまで寂しくなかなかったのに。新一の中に新たな感情が生まれていた。

装置じゃ作り出せない温もりが欲しい。そばにいただけで、笑い合うだけで、暖かくなれる温もり。

姿が見たい。会いたい。話したい。触れたい……。

何もつかめない手のひらをじっと見つめ、そっと指を折り曲げてみる。ひんやりした空気だけがこもった。

新一は携帯を持ち替えて、瞬きを幾度かした後、ぽつりと言った。

「蘭が今、オレの隣にいてくれたらいいのにな」

『ど、どづいたの？』

蘭は照れているのか、沈黙が暫し続く。

自分の無意識の内に出てきた言葉であるから、相手がどう思うかまでは一切考えていなかった。

蘭が明らかに動揺している（悪い意味ではなく）ようだから、自分が逆に照れてくる。

よくよく考えてみればこういう類の言葉は滅多に言ったことがなかったものだから、蘭が驚くのも無理はないのかもしれない。

二人の間に流れる沈黙の時を破ったのは、蘭であった。

『……わたしだって、今新一がここにいてくれたらなあとか思ってるよ』

「……………」

今の状況をふと思い返して、新一は改めて赤面する。

ああ、今日の自分はやっぱりどうかしているなと若干苦笑した。

蘭もまた我に返って、思わず出た一言を自分で「らしくない」と思っているのであった。

とは言え、今日くらいは素直になってみてもいいかなと次いで考えた。

『早く会えたらいいな』

「あと何日かしたら戻れそうだから、もうちょっと待っていてくれ」
『うん、楽しみにしてるね』

「日にちが決まったらまた連絡すつから、忘れんなよ？ オメーは忘れっぽいところあるしな」

蘭はついバカつと言いそうになりつつも「うん」と答える。他人からしたら、どんなバカツプルに見えるだろうと頭の片隅では思いながら。

さっきまでのマイナス思考は、殆どどこかへと消え去りつつあった。二人とも思わず笑みがこぼれる。

それから、蘭は思い出したかのように言った。

『あ、もう遅い時間。それじゃあ、おやすみなさい』
「じゃな」

新一は、自分の耳元から降ろした携帯電話を見つめ、思った。

自分は神様じゃないから、出来ることは限られている。けどその限られている中で出来ることを、全力でやろう。

もし自分には出来そうにもないことが目の前に立ちふさがったとしても。

挫けそうになることもあるかもしれないけれど、何度でも立ち上がってやるしかない。

自分が人から必要とされている限りは。

窓の外では、先ほどまで吹いていた風が止み、夜の静寂を取り戻していた。

story・6 HANABI (後書き)

今回は季節が冬の話です。

「今の季節に合わない!」という苦情は勘弁して下さいね……
あと三ヶ月くらいしたら違和感なく読めると思いますので(そういう問題じゃない)。

で、本編の話ですが。

新一氏はいつも堂々と立ち振る舞っていますが、彼にも落ち込む時くらいあるだろうということを書いてみました。

【参考にした曲】Mr・Children「HANABI」

story 7 White Light (前書き)

登場人物 新一、蘭

傾向(?) 純ラブコメ

備考 この話はstory・6と繋がっています。また、蘭はコナンに新一ということは知らない設定になっているので、その辺りを踏まえて読んでください。

Story 7 White Light

今日も冷え込みが厳しい。街中には、夏には史上最高気温を記録したというのに、あり得ない！などと嘆く人々が溢れていた。今、鏡の前でぶつぶつ独り言を言っている少女。細かく言えば、子供と大人の狭間にいる年齢だ。もその内の一人だ。

「あーん、どうしよう！ 早く決めなきゃなのに決まらない！」

先程から、自分の部屋と全身鏡のある場所を何度も行き来している。部屋の中は大量の服でごった返っていて、足の踏み場もない。

少女 蘭は、時計を見て余計に焦った。

きっかけは、新一の「クリスマススイブには帰れそうだから、その日は二人で出かけようぜ」という言葉だった。この頃彼は事件の調査に出かけていて、一ヶ月近く会っていない。寂しさが募る毎日。急に飛び込んできた、最高の知らせだった。

そうやって舞い上がったのも一時的なもので、すぐに蘭は悩める時間を過ごすことになった。「何を着ていこう？」一ヶ月ぶりに、しかもクリスマススイブに会うのだから、絶対に後悔しないようにしたいという思いで一杯という訳である。そんなこんなで、デート当日である今日まで決められずにいた。

悩むこと数十分（+今日までの約一週間）。何とか服装を決め、軽くメイクもし、ショートブーツを履いて外に飛び出した。待ち合わせしている米花駅まではそう遠くない。腕時計を確認してから、早足で歩き始める。汗をかいたり髪が乱れたりしない程度に。今日は新一に会えるんだなあ。そう思うと、自然と足取りも軽やかになった。

蘭が到着したのは集合時間の十分前だった。新一の姿は見当たらず。

ない。とりあえずは間に合ってよかった、とほっとした。駅はクリスマススイブ仕様で綺麗な飾り付けがされていて、周りにはカップルがたくさんいる。日は沈みかけ、暗い青色に近い世界の中に灯り始めたイルミネーションが浮かび上がっている。

悩んだ末に決まった、今日の蘭の服装はこうだ。ピンク色のニッポンワンピースに、茶色いファーが付いた白色のコート。小さな飾りの付いた金色のネックレス。駅の入り口で一人で待つ彼女に見惚れる男も少なくない。

辺りを見渡していると、携帯がメールの着信を知らせた。その送り主は、彼女が待ち侘びている人だった。

『ゴメン、飛行機の到着が遅れて今羽田に着いた。あと30分くらいかかっちゃうから先にツリーのところに行つててくれ!』
「飛行機が遅れたんだったらしょうがないかあ……」

蘭はつい携帯画面に向かって呟いた。近くにいたカップルが少しびっくりしていたが、本人は気づかない。でもまあ、もう新一は東京にいるんだ。本当にもう少しで会えるんだと思って、嫌な気持ちにはならなかった。

新一の言う「ツリー」とは、東京湾を眺められるショッピングモールの広場にあるものことだ。クリスマススイブ前後の期間限定で設置されていて、有名なデートスポットである。彼らは、ライトアップされる夜の六時半にここに来る予定だった。……が。

只今六時二十分。蘭は一足先にツリーの近くに着いたものの、やっぱり待ち人はまだ来ない。いつの間にか雪も降り始め、寒さは増していた。

そもそも彼女は、ツリー近くって言うてもどの辺りにいればいい

か聞くのを忘れていた。とりあえずツリーの北側にある小さな噴水の横に来て、壁にもたれた。

「……もうすぐでライトアップの時間になっちゃうじゃない。それに新一、ここ分かるかなあ」

何度か電話をかけてみたものの、着信に気づかないのかコール音が無限に続くだけだ。さっきのメールから三十分経ってるし、もう着いててもおかしくない時間よね？ ツリーが分かっちゃえば見つかりそうなものだけだ。もしかして新一、迷ってるのか？ って、新一は方向音痴じゃないんだから、そんな訳ないか。しょうもない思考を、頭を左右に振って脳から消し去る。

このまま会えなかつたりして。 。
急に、嫌な予感がした。

いつぞや、雪の中で彼をずっと待ったことを思い出した。あの時は（暗闇の中で）会えたけど、今日は……？ この問いの答えを知っているのは、たった一人だ。

冷えきった手を擦り合わせる。そのついでに腕時計を見ると、六時半まであと二十秒だった。蘭は壁から離れ、少しだけツリーに近づいた。周りの人々は皆ツリーを見つめていて、いつからかカウントダウンをしていた。

その声に合わせて口ずさむ。

「……10、9、8、7、6」

新一と並んで、一緒にカウントダウンしたかったな。

「5、4、3、2、1」

「……ゼロ」

あれ？

蘭が後ろから聞こえた声に気づいて振り返った瞬間、周囲の明かりが全て消えた。そして。

「きゃっ!？」

暗闇の中で、後ろから突然抱き締められた。何が何だか分からなくて咄嗟に身動きが取れなかった。

ツリーのイルミネーションが点灯され、周りに明かりが戻った時に、全ての謎が解けた。

「メリークリスマス!　ってか？」

「……新一!」

体を解放されてからゆっくりと振り向くと、そこには待ち侘びた人がいた。まるでイタズラを成功させた少年のように屈託のない笑顔を浮かべて、そこにいる。雪の一粒一粒が明かりを含んで、幻想的な雰囲気醸し出している。

驚きと喜びが一気に溢れて、蘭は何から言えばいいか一瞬分からなくなつた。

「何とか、イルミネーションの点灯には間に合つてよかった」

「えっと……いつからここにいたの？」

「明かりが消える三分くらい前から。オメーがいんのが分かつたから、ちよつと驚かそうかと思つて」

「ええ!？　……もう!　そんなバカなこと考えてるんなら話しかけてくれてもいいじゃないっ」

蘭は頬を膨らませて、そつぱを向いた。自分の後ろで新一が両手を合わせて謝っているのを想像しながら　実際、彼女の予想は的

中していた。

先程の嫌な予感単なる気のせいと終わつたのだ。会えたことだけで、全て後ろ向きな感情もどこかに飛んでいた。

彼女の冷えきった手を、新一の手がそっと包みこむ。丁度、マイナスとマイナスを掛け合わせたらプラスになるように、触れ合った掌てのひらから温もりが生まれ、広がっていく。

「悪気はなかったんだ」

「……分かってるよ」

新一が本当に意地悪する訳ないもんね、と小さな声で付け加えた。それからどちらともなく、手を繋いだまま歩き始める。

離れていたのはたった一ヶ月だったが、蘭にとつて会うのは久しぶりな気がしていた。だからこそ、ちよつと意地は張ってるけど、本当に嬉しい。まるで二人だけの世界にいるように思えてしまうくらいだ。

「七時半に近くのレストラン、予約してあるんだ」

「本当？ 前から思ってたけど、新一って意外とロマンチックなところあるのね」

「それって褒められてんのかけな貶されてんのか分からねえんだけど？」

「貶してはいないよ」

「褒めてもねえってことか」

「まあいいじゃない。七時半ってことはまだ時間あるよね。……よし。買い物、付き合っつてね」

「げっ……マジかよ」

蘭はふと空を見上げた。暗闇の中を小さな白色の粒が音もなく舞っている。

新一がいなかった時のことを思い出すこともある。最近は特にそ

うだった。いつかまた不安になったり恐いことがあつたりしても、きつと大丈夫。根拠は何もないけれど、そう思えた。

もう二度と、彼が自分の知らないどこか遠くに連れて行かれないように、繋いでいる手に少しだけ力をこめた。

story 7 White Light (後書き)

本日二話目の投稿です！

決して常に二話ずつ投稿するという暗黙の了解(？)が出来た訳ではありません。

多分、次回からは普通に投稿していくと思います。

今回の話は……今回の参考にした曲を聴いたとき、昔個人的に書いた小説を思い出したことから始まっています。

元ネタでは新一と蘭がニューヨークでクリスマスを過ごす話でした。でも、行ったこともないところを舞台にしてもなあと思って今回は日本にしました。

実在するところを使うならちゃんと書きたいってこともあるので。

うーん、再会するまでが無駄に長くなってしまった……。

何か突っ込みどころ(誤字・脱字とか)や感想などなどありましたら、遠慮なく作者まで！

【参考にした曲】安室奈美恵「White Light」

Story・8 Please Stay With Me (前書き)

- ・登場人物 蘭、コナン
- ・傾向 ややしリアス
- ・備考 26巻、蘭が新一の携帯番号を教えてもらつた巻(何巻か忘れました)までの間の出来事として読んで下さい。

Story・8 Please Stay With Me

存在が傍にあることの安らぎを知ってしまったからこそ、より寂しさは募る。一緒にいたのはたったの一日だったけれど、今でもありありと思い出せる。

「死んでも戻ってくるから、それまで蘭に待っててほしいんだ」

蘭は時々、コナン伝いに聞いた新一の決意を思うことがある。その度に安心に似た気持ちになる一方、不安もあるのだ。何も聞けないまま、またいなくなってしまうからだ。

「新一、大丈夫かなあ。危ないことに首を突っ込んでなければいいけど」

「しっ、新一兄ちゃんなら大丈夫だよ！」

いなくなった新一の代わりに現われた男の子。自分よりも十歳年下だけど頼りたくなる、不思議な子だ。夕ご飯の時にこんな話をするのは少しおかしいのかもしれない。バラエティー番組の出演者が盛り上げる声や効果音だけが空間に響いている。

「そうだよね！ ゴメンね暗い話しちゃって。テレビ見よっか」

便りが無いのは何とかの証とか言うものね。考えすぎたらダメになっちゃっつか。そう思ってわたしはバラエティー番組に集中することにした。

けれど、一人になるとやっぱり色々考えてしまう。机の上に置いてある携帯に手を伸ばし、画面を見つめた。今日も連絡はない。依存してるな、と苦笑した。

「忙しいなら電話なんかしてる場合じゃないよね」

ふう、と溜め息をつく。電話番号を知らないからこそいいこともあるのかな、とふと思った。もし知っていたら掛けまくるかもしれない。「会いたい」なんて言って困らせたくはない。

けれど、やっぱり会いたって思うんだ。

「……ダメだなあ、今日は」

一回鼻をすすった。この前の学園祭のこととかレストランのこととか色々考えていたら、涙が自然と出てきたのだ。「会いたい」と少し願っただけでこうなっちゃうなんて、自分は弱いなあと思う。こんなわたしを知ったら新一は何て言うかな。

ねえ、探偵さん。探偵だったら、わたしの気持ちを一つ一つ解き明かしてみせてよ。言い逃れが出来ない証拠をたくさん示して、事実を認めざるを得なくなるようにして。

いつも新一は何もかも見透かしているみたいにわたしのことを話すよね。でも、わたしはあなたのことは何も分らない。どこで何をしているかすら、あなたは何も言わないもの。ただ「待っていてくれ」って言うだけ。……聞いてもいい？ もし今すぐ聞いたら教えてくれる？ 何も言わないのは、何か訳があるからなの？

色々聞きたいことはあるけれど、今伝えたいことはたった一つだけだ。

「そばにいて」

窓の外に見える夜空に向かって呟いた。

この呟きは彼に届くことはない。伝えたいとは思っているけれど、もし実際にそうしたらならきつと彼を苦しめてしまう。ジレンマだ。

溢れかかった涙を手で拭う。まだ洗い物が残っていることに気づいた。早く終わらせなきゃ。ベッドから立ち上がり、部屋のドアを開いたその時。目の前に小さな影が現われた。

「わっ」

「コ、コナン君!？」

ギリギリのところであつたのは避けられた。ゴメンと両手を合わせて謝ると、コナンはまじまじと蘭の顔を眺めた。

「蘭姉ちゃん、泣いてたでしょ。目が赤くなってる」
「え」

眼鏡の奥にある二つの瞳は何もかも見透かしているようである。何も隠せない、と直感で思わされてしまった。蘭は否定するのも忘れてふっと笑った。

「……新一には秘密よ?」

泣いてるなんて弱いもんね

コナンは何か言おうとしていたが、蘭はすぐにその場を立ち去っ

た。このまま話をしていたらまた泣いてしまいそうだから。

台所にある窓からも夜空が見えた。今度は、さっきとは少し違った風に吹く。

「早く帰ってきてよね」

実際に自分が伝えられる言葉の限界はこれくらいだと思った。

蘭の気づかないところで、この言葉はちゃんと届いていた。彼女を気に掛けて、追い掛けてきた本人に。

Story・8 Please Stay With Me (後書き)

会いたいと言いたいけれど言えない。言えないけれど……的な、蘭の揺らぐ気持ちを描写しようとする。うーん。どうでしょう？ 探偵だったらその辺りは個人的には気に入ってます。そう言えば。夕ご飯の場面で小五郎がいませんが、近所の人たちと麻雀をやっているってことにして下さい。ここまで入れる必要はないと判断して前書きには入れなかった次第です。

【参考にした曲】 YUI「Please Stay With Me

re

s t o r y ・ 9 音のない森（前書き）

- ・ 登場人物 新一、蘭
- ・ 傾向 シリアス

story・9 音のない森

夜空は厚い雲に覆われている。その微かな隙間から射し込む月の光は、頼りなく地面を照らす。設置してある電灯はチカチカと点滅していてほとんど意味をなしていない。

「はぁ、はぁ……くそっ、体が……思うように、動かねえ」

さつきよりも痛みが増し、視界もやや霞んできた。俺は一体立ち止まり、右足に目をやった。まるで自分のものではないかのように重くなり、ただのお荷物と化している。どす黒い血がジーンパンに滲み、道路にまで跡をつけていた。これじゃあ必ず奴らに見つかってしまう。俺は痛みを堪えながらまた歩き始めようとした。

ふと横を見ると、木々が生い茂る場所 多分、森だろう に気づいた。ここなら足跡を消せるかもしれない、そう思って中へと入っていった。

何分歩いたかは分からない。おそらく森の深部に入った時、俺は大木の根につまずき、そのまま倒れこんでしまった。起き上がる力ももう残っていない。そのまま体を仰向けにし、空を見上げた。月はその姿を隠してしまい、辺りはほとんど暗闇となっている。

案の定、地面や落葉によって跡は全く残らなくなったらしい。これなら奴らもすぐには見つけられないだろう。しかし安心したのは束の間で、すぐに底知れぬ恐怖に襲われた。辺りからは葉のこすれ合う音すら聞こえてこないのだ。自分の息遣いと足を引き摺る音がなければ、無音の空間だ。

「ら、ん……」

一番いとおしい人の笑顔が脳裏に浮かぶ。彼女はきつと今も自分を待っていてくれてくれるだろう。無傷の左手で落葉を握り潰し、自分の無力を呪った。

「ごめんな、蘭……俺はもうオメーには会えねえ。本当にごめん……。言葉にもならず、脳内で繰り返すばかりだ。光も音も届かない場所で俺はただ絶望していた。」

元々、何もかもが無謀だった。組織の本部を見つけると否や、俺は後先考えずに突き進んでいった。周りが反対したにもかかわらず……。そして今に繋がっている。自業自得である。かつて組織の奴らに薬を飲まされ、体をちぢめられてしまったあの時から、自分は成長していなかった。

いつか必ず元の姿に戻り、彼女にまた会いにいかうと思っていたのに。そこまで考えて、初めて俺は気づいた。自分がマイナス思考になっていることに。

意識がだんだん遠退いてゆく。まぶたが自然と重くなり、開こうという気すらも起こらない。

「……蘭……」

脳裏に浮かんでいた蘭の笑顔は徐々に消えてゆき、最後に目の前は漆黒の闇となった。

「……………新一」

遠くから声が聞こえてくる。まぶたをゆっくり開けると、まばゆい光で目の前はすぐに真っ白になった。それから少し経つと、その中に一人の女性が見えた。

「ら……ん」

「新一………！ よかった！」

蘭はぼろぼろと涙をこぼしている。

何がどうなったかはよく分からないけれど………どうやら俺は、本当の光に向かって歩き始めることができたらしい。

story・9 音のない森（後書き）

一日で書き上げました。

手負いの新一を書いてみたかったただけだったり。（笑
何だか伝わりにくい話になってしまったような気が……
（ ^ - ^ ; ）

【参考にした曲】ポルノグラフィティ「音のない森」

story・10 ウィークエンドのまぼろし(前書き)

- ・登場人物 少年探偵団
- ・傾向 ほのぼの

story・10 ウィークエンドのまぼろし

物事の始まりはいつだって突然訪れる。いつそれがやって来るかということは、自分の意志通りにはならない。それ自体を自分が待ち望んでいようがいまいが。

今日は日曜日だ。といっても、ただの日曜日ではない。五月の連休最終日という、いつにもまして有効活用したい貴重な時である。

こんな時に限って快晴、遊び日和か……あーあ。コナンは空を仰ぎ、思い切り嫌な表情を浮かべた。

「おいコナン！ ちゃんと話聞いてたのかよ？」

「わあってるよ。隠れられんのはこの公園の中だけで、鬼は一分数えりゃいいんだろー？」

「ただのかくれんぼじゃありませんよ！ 今日は缶蹴りをやるんですよっ」

「さっきじゃんけんで負けたから、コナン君が鬼さんだよ」

元太、光彦、歩美は次々に言った。とにかく早くかくれんぼ……ではなく、缶蹴りをやりたいらしい。本来の予定ならば、今日は室内で新作の推理小説を一気に読むはずだったのに。コナンの気持ち悟ったのか、哀は傍観者に徹してくすくす笑っている。

救いの視線を送ってはみたものの、気づかないふりをあからさまにされた。はあ、と内心ため息をつく。しょうがない、とにかく早く終わらそう。そう思ってコナンは話し始めた。

「んじゃ、数えっから缶をくれよ」

「はい。ちゃんと、目をつぶってあの木の下で数えてね？」

「へいへい……」

コナンは歩美から缶を受け取り、彼女が指差した木の方へ向かった。あまり大きくはないけれど、公園のシンボリック的存在だ。公園の敷地内にいれば必ず目に入る木である。

そこから少し離れ、右足で半径目測一メートルの円を描き直し、中心に缶を置いた。

元太たちは早くも様々な方向へ散って行く。

彼らの背中を見送った後、コナンは木によりかかった。こうなりやもう、探偵の名にかけて全力で探してやろうじゃねえか。決意して、数をかぞえ始めた。

「おっと、元太はそこに隠れていたか！」

「やべ、見つかった！」

元太の姿を見るや否や、コナンは木の下まで駆けて行き、缶に足の裏を載せた。

「元太見ーっけ！」

わざと公園中に響き渡る声で叫んだ。

元太は唇をとがらせ、悔しそうに物陰から出てきた。缶が置いてある円の辺りには、既に全員が集合している。

「何だよ、もう皆見つかったのかよ！」

「だってコナン君、見つけるのすごい上手なんだもん」
「缶を蹴るうにも、油断も隙ありませんから……」

コナンは嬉々とした表情で、缶を空中に投げたりいじったりしている。全員を見つけたことも喜んではいたが、一番喜んだのは遊びからの脱却に一歩近づいたことだ。あえてそれを口に出さないのは、楽しげに遊びに興じる子供たちを傷つけるようなことは一応避けたいからである。

口々に感想を述べる子供たちを尻目に見ながら、哀も一言口にした。

「まあ、さすが江戸川君つてところね」

「……灰原に褒められると何か不気味だな」

「あら、何か言った？」

「いや、何も」

小声で呟いたはずなのに恐るべし地獄耳、とは口には出せなかった。ともかくにも鬼の肩書きからは解放されたのだ。次は探される立場になる。これを何度か繰り返し返せば最終段階 缶けりからの脱出に到達できるだろう。遊びはつまらない訳ではないけれど、今日はとにかく早く帰りたい。

ちなみに見つかった順番は、歩美、光彦、哀、元太の通りである。彼らのルールでは最初に見つかった人が次の鬼となる。

「んじゃ、次は歩美ちゃんが鬼だな」

「うん！」

彼女が木に両腕をつけたのを確認し、コナンは走りだした。

この公園には隠れやすい場所が多い。幼い頃からよくサッカーを

しに来ていたためによく知っていた。公園の配置図を思い描き、例の木から近く姿が見つかりにくい場所を推理する。すぐに一つ思いつき（容易いことだった）、缶を蹴るプランを練りながらそこへと向かった。

そこは小さな茂みがあるだけだが、缶のある場所からは遊具のせいで死角になっている。コナンは着くやいなやしゃがみこみ、茂みの隙間から歩美の様子を窺った。数え始めたのが遅かったのだろうか、まだ二十秒付近を数えているところだった。

「あら、偶然ね」

そんな中横から聞こえた声の主は、哀だった。コナンと同じようにしゃがみこんでいる。

「同じ穴のムジナってことかしらね」

「ちよつと違うような気もするけど………そついやオメー、缶蹴りってやったことあったのか？」

「いいえ、今日が初めて。中々興味深い遊びよね」

「まあ、そうだけど………高校生にもなつて、缶蹴りってーのはちよつとなあ」

苦笑したコナンに哀はくすりと微笑んだ。

「まるで鬼が組織のメンバー、缶は組織の何か重要なものみたいじゃない？ 私たちは、彼らを負かすために息を潜めて機会を窺っている。彼らは自身の危険にも気を配りながら辺りを捜し回り、私たちターゲットを見つけたら彼自身で私たちの終止符を打つ………つてね」「おいおい」

彼女の微笑みが恐ろしく思えてきた。確かに上手い例えだとも思

つたが……。

いつの間にか歩美は数え終えたらしい。缶を気にしながら探し始めていた。

「で、名探偵さんはどう行くつもりかしら？」

「そうだな、歩美が何かに気を取られた隙を狙って……まだちゃんと考えてねえけどな。探偵バッチが使いりゃー、光彦や元太とも連絡取れるんだけどな」

今回の缶けりでは探偵バッチの使用は禁止されていた。簡単に戦略が練れるからというのが光彦の意見だったらしい。普通缶蹴りでそこまで考えるかと、コナンはもはやすごいなと思っていた。

「案外真剣にやってるのね」

「んなんじゃねえって。今日は家でのんびり過ごそうと思ってたのによ、アイツらが朝っぱらから来るから。早く終わらせて、帰りてえんだ」

「なるほど？ 明日から学校も始まるものね」

「ああ。つたく、最悪な日曜日だぜ」

たまには放っておいてもらいてえよ。コナンがそう付け加えると、哀は「なるほどね」と納得して、しゃがむ姿勢を変えた。

「私は悪くないと思うけど。こうやって、皆といることって」

そして、そう言い残すと、その場を離れてどこかへと静かに駆けていってしまった。

彼女の背中に気を取られていたコナンは、近づいてくる影に気づかなかった。

「あ、コナン君だ！」
「うわっ、やべえ！」

歩美の声でようやく自分の状況を理解した。数メートル先を走る歩美に向かって猛ダツシユする。彼女の五十メートル走のタイムを考慮すると、自分の足の速さなら何とか追いつけるだろう。缶まであと六メートル、五メートル……もう少した！ しかし、どうやら彼女に気づくのが遅すぎたらしい。コナンの計算通りにはいかず、あと一歩というところで缶を踏まれてしまった。

「コナン君、見ーっけ！」

「あーっ、ちくしょー！ あともうちよっただったのによ」

「コナン君、また鬼さんになっちゃったね」

はい？ コナンは、歩美の言葉を聞いて初めて気づいた。周りには、彼女に見つかった者はまだ誰一人としていなかったことに。

「今日は、皆でいーっぱい缶蹴りしようね！」

コナンの本心を知ることもなく、歩美はまばゆいばかりの笑顔で浮かべて言った。そして、また隠れている人たちを探すために走っていった。彼女の足取りが軽いのは対照的に、コナンのそれはどんどん重くなっていく。

「…………たたくよー」

確かに哀の言う通り、こつやって遊ぶのは嫌いではない。高校生だった頃は、毎日朝から晩まで泥まみれになりながらずっとサッカーに夢中だったから、むしろ好きな方かもしれない。しかし……。

「やっぱり今日は、最悪な日曜日だな」

円の中心に置かれた缶を見ながら、壮大にため息をついた。

story・10 ウィークエンドのまぼろし（後書き）

記念すべき？10話は少年探偵団ものとなりました。缶蹴りは小学生の時によく校庭でやっていたので、懐かしみながら執筆しました

（^^^*）

このお話でのコナン氏が原作のキャラとずれているような気が……

（^^^；）

とまあ、それは「主観論シリーズ」に出てくる人物全てに言えることなんですけどね……。

【参考にした曲】チャットモンチー「ウィークエンドのまぼろし」

story・11 遭難（前書き）

- ・登場人物 コナン、哀、阿笠博士
- ・傾向 シリアス
- ・備考 コ哀傾向なので新蘭好きの方（私もそうではありますが…）はご注意ください。

雨が激しく地面を叩く。ところどころ出来ている水溜まりを避けながら、コナンは自分の前を歩く少女を追い掛けていた。傘をさすことも忘れるほど、夢中になって走っていく。

埠頭に入り込んだため、哀には逃げ場がなくなった。彼女は引き返して何とかコナンの横を抜けようとする。しかしコナンは彼女の腕を素早くつかみ、何とか引き止めた。彼女はもがき、逃れようと試みるが、コナンの力が強くてそれは叶わなかった。

「離して！　ひとりにしてほしいうって言ってるじゃない！」

「バ一口、こんな雨の中傘もささずに出てった奴を放っておける訳ねえだろ！」

「大体、あなたには私よりも気になきゃいけない人がいるじゃない」

「蘭は……いいんだ、オレがいなくても」

彼女　哀の腕をつかむ力は少し弱まった。しかし彼女は逃げることもなく、弱々しい笑みを浮かべるコナンを見つめている。目の前にいるのは本当にあの彼なんだろうか、と疑いたくなってしまうくらいの表情だ。普段犯人を追いつめたり、得意げに自らの推理を披露したりする時の彼とはまるで別人のようである。

事の発端は数十分前に遡る。

毎日暗い空模様が続く梅雨期の中の、ある雨の日。小学校が創立

記念日で休みだったので、コナンは朝から博士の家に来ていた。少年探偵団の面々とは今日は何も約束していないし、博士の家にも来ていない。コナンのために苦いコーヒーを淹れながら、博士はコナンに問うた。

「珍しいのぉ、君がここに朝から来るなんて。何かあったのか？」

「いや、別に……何もねーけどさ」

と言いながら、コナンは辺りを見回したり足を前後に動かしたりとどこかそわそわしている。それもそうだ。彼は今日、一応の目的をもってここへやって来たからである。そんなことに気づかない博士は（博士に限らず、彼の目的に誰も気づくことはできまい）、自分の淹れたコーヒーに砂糖を大量に入れつつ、話を続ける。

「暇つぶしかの？」

「暇つぶし、じゃねーけどな。そーいや、アイツは？ また地下室にこもってんのか？」

「ああ、哀くんならここのところずっとそうじゃよ」

博士はそう言ってたっぷり砂糖入りコーヒーを美味しそうに飲み干した。そんなに砂糖を入れて飲んできると病気にかかるぞ、と言いたくなつたがやめた。博士への助言はこの家の”不機嫌あくび娘”に任せることにした。

「最近何か悩んでおるみたいなんじゃよ……問い詰めるのもよくないからワシは何も言わないんじやが、新一くん、ちよっと様子を見てきてくれんか？」

「ああ、んじや行つてくるよ」

彼女が悩んでいるとしたら組織関係のことだろう。コナンは地下

室への階段をゆっくり降りて行った。どうせあいつのことだから、人に迷惑かけないよう自分ひとりで抱え込んでいるに違いない。そう思ってからコナンはかつて彼女に言われたことを思い出し、ひとり苦笑した。同族だからこそ分かることもあるのかもしれない……と。

地下室の前に立ち、その扉を三回ノックした。

「灰原？　ずっとここに籠ってるんだって？　また何かしょーもねえことで悩んでるんだろ？」

返答はない。気分を害したかもしれないとも思ったが、今は彼女をここから引き出すことが先決だ。コナンは固く閉じられた扉に向かって話を続ける。

「出てこいよ、博士も心配してるんだぞ」

「しょーもないって何よ、勝手に決めつけないでくれる？」

扉の向こうから聞こえた声は、彼女が今明らかに不機嫌だということを示していた。こりゃ手間がかかりそうだな。コナンはため息をつき、また話を続けた。

「何があつたんだよ、オレで良ければ話聞くぞ？」

「あなたに話したって解決しない話よ。だからそこ離れてくれる？」

「落ち着かないのよ」

「いや、オメーが出てくるまで離れねえよ。博士、本当に心配してるんだぞ」

数秒経ったのち、閉ざされていた扉が控えめに開いた。コナンが中をのぞくと、真っ暗な室内にパソコンの煌々とした画面だけが浮かんでいる。明かりのスイッチをつけつつ部屋に入った。しかし哀

がすぐにそのスイッチを切り、またすぐに室内はほぼ暗闇に戻った。彼女の行動の真意が分からず、コナンは哀の影を見つめることしかできなかった。

「わざわざここまで来てあなたは何したいの？」

「だーから、さっきから言ってるじゃねーか。オメーが毎日悩んでるのを博士が気にしてんだって」

「ちょっと放っておいてくれない？ さっきからズカズカと入ってきて、何なの？」

「……？ オメー、どうしたんだよ」

コナンが哀の肩をつかむと、哀はそれをさっと取り払った。思いがけないその力の強さにコナンは思わずたじろいだ。今まで見たことがないくらい彼女は機嫌を損ねている、と直感的に分かった。どんな言葉をかけていいか迷っている間に、哀はコナンの横を通り抜けて階段を駆け上がった。いった。

「待てよ灰原！ 言わなきゃ何にも分かんねーだろ！」

つけっ放しのパソコンのことも忘れて、コナンは哀の後を急いで追いかける。角を曲がった先にある玄関の方からドアを勢いよく開け、閉める音が聞こえた。迷わずコナンも玄関を飛び出す。外は雨が降り出していたが、傘も持たずそのまま走って行った。ザー、ザーと激しく雨の降る中に、コナンの呼吸音が響く。とにかく哀を引き止めなくては、その思いだけがコナンの足を動かしていた。

「あの子のために今まであなたは動いてたんじゃないの？ それなのに」

「確かに最初はそうだったよ。でも、今は違う。蘭は、オレがいなくても元気でやってっからさ」

「そんなのあなたのエゴでしょ。彼女は見ええないところで悲しんでいるはずだわ」

哀の言葉でコナンの身動きは一瞬止まった。脳裏に蘭の笑顔そして泣き顔が儚く浮かんできたが、すぐに消え去った。彼女が自分を必要としないんじゃない、自分が彼女を必要としなくなっ（てしまっ）たのだ。今自分に必要なのは 目の前にいる、哀だ。数秒経つてからコナンは建物の壁に寄りかかった。雨水がじわりと服にしみこみ、背中に届いた。

「どうだか。この前、米花駅で空手部の先輩と楽しそうに歩いているの見たぜ？ あのままで行ったら付き合ったりするんじゃないかな」

蘭が先輩と歩いていたのは事実である。卒業する三年生の先輩に渡すプレゼントを探していた、と後で本人からも直接聞いた。しかし、蘭の本当の気持ちは自分の知るところではない。コナンは嘘を積み重ねる自分を内心笑った。哀に、自分の気持ちを全て伝えてしまいたいのに、蘭に対して申し訳なさをも感じている。抜け出せぬジレンマの中でコナンはひとりもがいていた。

悩んでいる表情（が、表に出ているかどうかは分からないが）を見せたくないから、

「んなことより、オメー何を悩んでるんだよ？ いい加減教えてくれたっていいだろ」

「そんなことって あなた、いつからあの子のことそんな風に思

うようぶになったのよ」

「それは、オレがオメーのことを」

「言わないで！」

その声のトーンに驚き、コナンは思わず目を見開いた。

「あなたがそれを言ったら……何もかも壊れる気がする、から。あの家にはちゃんと戻るから、だからもう何も言わないで」

哀は我に返ったのか、声は少々落ち着きを取り戻していた。そして、コナンの返答を待たぬまま、背を向けて静かにその場から歩き始めてしまった。コナンも彼女を見送ることなく、彼女の後姿にただ背を向け続けている。両手を強く握ってみたが、水滴が集まって掌が滑り、冷たくなっただけで全く頼りない。ただ一つ分かったのは、自分と彼女がこんなことになったのは、自分たちが出遭ってしまったせいだ、ということだった。

story・11 遭難（後書き）

自身で初めてコ哀作品を執筆してみました。一回曲を聴き、内容をイメージをして、書き始めてみたら案外すらすらと進めることができました。

基本的には新蘭好きなのは変わっていませんのでそこはご了承ください（^^*）

とはいえ、やっぱりシリアスに走る傾向はばっちりありますね。ここんところ暗い話ばかり。うーん……いや、私は暗い話大好きなんですけど、さすがにずっと続くのはよくないですね（^^;）次の話は幸せラブコメ書きます！新蘭か平和かは未定ですが……お楽しみに。

【参考にした曲】東京事変「遭難」

s t o r y . 1 2 桜の花びらたち（前書き）

- ・登場人物 新一、蘭
- ・傾向 ほのほの

story・12 桜の花びらたち

「あ、新一見て見て！ 桜、もうすぐで咲きそうだよ」
「そうだなー……」

卒業式を終えた新一と蘭は、二人で他愛ない会話をしながら歩いていた。蘭の指差す先には小さな桜のつぼみ（にも、なっていないものの中にはある）があつた。

帝丹高校の表門付近には昔から有名な桜並木がある。数十年前に生徒たちによつて植樹されたという記録が残っているそう。入学式や今日のような卒業式の日には、その辺りに生徒たちが集まって部活の勧誘をしたり思い出を語り合ったりしている。今日は新一と蘭はあえてそちらには行かず、裏門付近にある一本の桜の近くにいた。他の生徒たちは皆表門へ行っているため、新一たちの周りには人の気配すらなかつた。

「こっちは静かだね」

「表門は人がいっぱいいるから落ち着かねえんだよなあ」

「後輩たちが『工藤せんぱーい！』って皆来るもんね。いいことじゃない、プレゼントだつて沢山貰えたんだから」

「置場に困りそうだけどな」

そう言つて、新一は苦笑した。貰つたプレゼントがあまりに多すぎて持ちきれないため、自分の机上に置いてきた。後で分けて持ち帰ろうと思っている。ちなみに制服のボタンも根こそぎ持っていかれてしまい（争奪戦はかなり激しかった）、気持ち的にも身体的にも疲労困憊であつた。蘭と二人きりでいられるのが唯一の癒しである。

「第二ボタンも誰かが持ってたんだね」

蘭は新一の制服を見つめながら、寂しげにそう呟いた。数か月前に二人は十数年の時を超え、「幼馴染」から「彼」「彼女」とお互いに呼べる間柄になった。二人とも恋だの愛だのには超がつくほど奥手なため、何か特別な出来事は特に起こっていないけれど、二人なりに幸せである。新一は蘭を愛おしく思って頭をくしゃくしゃと撫でた。

「バ一口、探偵なめんなよ？」

そう言っただけで蘭の右手を開かせると、そこにボタンをそつと置いた。他の誰かに取られてしまわぬよう、昨日あらかじめ取り外しておいたのだ。新一の思惑通り、第二ボタンは誰の手にも渡ることなく無事に持つべき人へと渡ったという訳である。

「これ……第二ボタン？ まさか最初から外しておいたの？」

「ずっと前から、これを渡すのはオメーだけだっただけだからさ」「本当？ ありがとう。あ、わたし、代わりにあげるもの何も用意してないよ」

蘭の言葉に、新一はどう返そうか考える。「オメーがいればそれでオレは十分だよ」？ 「だったらオメーの何かを今もらうよ」？ いやこれは絶対今のオレは言えない、言いたくても言える訳がない。というか、言えたら何も苦労してないっつーの……新一が様々に思いをめぐらせていることにも気づかず、蘭は困った表情で立っている。

「あー、いいんだよ蘭は、どうせこれだっただけのボタンだし。もう制服だっただけさ」

「そんなことないよ、第二ボタンって他のボタンとは大違いなんだから！ 何かわたしも新一にあげなきゃ……何がいい？ 何でも言っつて」

何でもって言われても……っつて、これはある意味チャンスなのかな？ チャンスなのかなー！？ 新一はひとり顔を赤くして若干混乱している。男心を全く理解していない蘭は、何も悪気もなくあの言葉を言ったのだ。そのことも念頭に置いて新一は自分の思考回路をフル稼働させる。

ずっと黙ったまま何も言わない新一に、蘭は「ずっと」「？」の記号を浮かべたような表情を浮かべている。

「ちょっと新一、黙ってても何も分からないよ？ ……じゃあ、プレゼントまた後でいいかな？ 考えておくね」

「あ、うん」

蘭から貰えるならどんなものでも嬉しいしな……新一は自分を納得させて、プレゼントにまつわる思考を強制終了させた。

蘭は背伸びして桜のつぼみに手を伸ばした。摘み取ってしまうこととはせず、指先で軽くつつついた。

「三年間、色んなことがあったけどあつたという間に過ぎちゃったね。周りの皆も大人っぽい表情してるっていうかさ……この桜が咲く頃には、皆未来に向かって歩き始めるんだね」

「皆だけじゃなくて、オレもオメーもな。それに、今だって少しずつではあるけど変わっていつてるよな」

新一の言葉を聞いて、蘭は入学式の日のことを思い出した。新しい制服やバッグのにおいに、固くてまだ足になじまないローファアの音。自分がこれからどう高校生活を送るのだろう、と期待に胸を

膨らませていた。

今だからこそ言えるのは、この三年間は辛いことや悲しいこともあったけれど、大切でかけがえない日々だったということだ。新一と離ればなれになっていたからこそ、彼の存在の大きさに気づくことが出来たのだとも思う。

「変わらないこともあるよ。例えば……わたしが新一のことを好きってこと、とか」

「……オレだって、同じだ。何年経っても何十年経っても、変わらねーよ。オメーのことを、誰よりも大切に思ってるってことはな」
「ありがとう」

新一は恥ずかしがって、蘭から思い切り顔ごとそらした。それでも彼女には彼の真っ赤に染まった耳が見える。素直になりきれない彼を「かわいいな」と思う。本人には絶対に言えないけれど。

どちらともなく二人は手を繋いだ。その二つの掌の間には、新一が蘭に贈った第二ボタンがあった。そのことに気づいて、新一は蘭の顔をちらりと見る。彼女は照れ笑いを浮かべてから、前を向くと、更に彼に寄りそった。

桜のつぼみが開く頃にも、二人は今と同じく過ごしていることだろう。彼らは彼らのままで、未来に向かって歩いていく。

story・12 桜の花びらたち（後書き）

卒業式シーズン過ぎてるわい！ 入学式シーズンも過ぎそうじゃねーか！ そもそもあんたの小説大体季節無視してるだろーが！ つて意見が飛んできそうですな……（^^;）

【参考にした曲】AKB48「桜の花びらたち」

story・13 ボクの背中には羽根がある(前書き)

- ・登場人物 コナン、蘭
- ・傾向 ほのほのラブコメ
- ・備考 このお話はstory・5の続編です。そちらを読んでからこちらを読むことをお勧めします。

瞼をゆっくり開けると、朝日の筋がまっすぐに目に入ってきた。

あ、もう朝か。コナンは上半身を起こし、大きな欠伸をした。昨晩は久しぶりに良く眠れたような気がした。小説を読破したり資料に目を通したりするために、工藤新一の頃から夜更かしには慣れてきた。寝つきが悪いわけではないが、自分の睡眠は浅い方だ、と思っていた。

アイツに本当のことを言えたから、安心したんだろうな。

いやまあ、安心したのは自分だけかもしれないけど、と数秒経つてから一人突っ込みをした。

両手を天井に向けて伸ばしながら、コナンは昨夜のことを思い返す。自分たちの会話が蘭に聞かれたと分かり、これからどうしようかとずっと考えていた。小学生の演技を貫くべきか、それとも蘭に屋上へ行こうと誘われた時、これから何が起こるかは容易く確信できた。責められる？ 怒られる？ それならあって当然だと思った。甘んじてその罰を受けよう、と覚悟した。

しかし蘭はそのどちらもしなかった。今にも泣きそうな顔で暗闇の中でもはっきり分かった。静かに一言だけ言った。

『どこにも行かないで』

え？ と、一瞬思考が停止した。それだけでいいのか、との。自分の頷いた時に蘭が見せた、ほっとしたような笑顔はきっと一生忘れないと思う。

まあ、とだけ呟いた。

例えどこの誰に頼まれたとしても、蘭を独りになんかしねえけどな……。

思ったと同時に、部屋の扉が開いた。

「ちょっとまだ寝てるの？ もう朝の十時半よ！」

「へっ？ あ、そうだったのか……。あれ」

隣に目をやると、小五郎の姿がないことに気づいた。既に朝ご飯も済ませて、いつものように事務所のデスクチェアに座っているのだろうか。

しかももう十時半とは。こんなに寝過ぎしてしまうとは本当に今日は快眠だったんだな、と内心苦笑した。

エプロン姿の彼女は、頬を膨らませながら傍まで歩いてきた。そして、隣に静かに座る。この小学生の姿としては、初めて対等な立場で会話を交わす時だ。違和感とほんの少しの緊張感が入り混じる息を吸って、話し始める準備を整えた。と言っても、何から話せばいいかは分からないが……。

コナンよりも先に蘭が話し始めた。

「お父さんならもうとっくに朝ご飯食べて依頼人さんのところへ出かけてるよ！」

「あ！ あのさ、おっちゃんにオレのこと」

「言ってるよ。まだ言わない方がいいかなって思ってる」

コナンはほっとした。自分の娘が、自分が目の敵 多分、そうじゃないかと思う にしている男と同居していたなんて事実を小五郎が知ったらどうなることやら。少なくとも、良い想像は浮かんでこない。これから先も彼には知らせない方がよさそうである。

「とにかく！」ぼーっと思考に耽ったままにいるコナンを制するよ
うに、蘭は言った。「ずっと寝てちゃダメでしょ、お寝坊さん？」

今日はお祭り行くんだから、それまでにはちゃんと起きてよね」

ふっと笑って、コナンの額をつんとつついた。そして踵を返し、部屋を出ていった。

おいおい、そりゃ反則だろ？ 頬がどんどん熱くなっていく。アイツは、オレの正体を知っててああやったんだよな。考えれば考えるほど深みにはまってしまいそうだ。

ある意味今の状態の方が苦勞するかもな、と思い、先程とは違う種類の苦笑をした。

今日は、米花市に流れる山根川のほとりで、有名なお祭りの「山根祭り」が行われる日である。山根祭りでは、日中は山車が川原付近を闊歩し、夜になれば地域で最大規模の花火大会が行われる。家族連れやカップル、友人同士で連れ立って町中の皆がやって来る。確かな情報ではないが、町外や市外からもたくさんの人々が来場するという。

山根祭りが始まる時間は正午。

「ねえ、し……コナン君」新一、と言いかけて蘭は口を一旦噤んだ。そして、気を取り直して、

「今日の山根祭り、誰かと行く予定ある？ 歩美ちゃんたちとか」

「ああ……そうだよ。博士も一緒」

今、家の中にはコナンと蘭の二人しかいない。かつての二人のように、名前呼び合うこともやろうと思えば出来た。しかし彼らは「コナン君」と「蘭ねえちゃん」を演じている。理性が彼らを押しさ

えつけていたのだ。

「そっか……皆には悪いんだけどさ、今日のお祭り、わたしと一緒に
に行かない？」

「え、蘭ねえちゃんはいいの？ 園子ねえちゃんと一緒に行くんじ
やなかったっけ」

「園子ね、京極さんと会う約束があるって昨日言ったの。だから
今日は、誰とも行く予定ないんだ」

「そうなんだ……。蘭ねえちゃんがどうしてもって言うなら、いい
けど」

「本当？ ありがとう」

そう言っつて蘭は微笑んだ。そんな彼女の笑顔に、コナンは弱い。
つたく、しょうがねーなー……と思いつつ、悪い気はしていない（
博士たちには若干申し訳なく思っているが）。

会場は、とにかく賑やかだ。どこを見ても人、人、人の山である。
川原や付近の通りにはたくさんの屋台が並び、特設ステージでは色
々な催し物が行われている。人々の会話する声や様々な音が混じり
合い、祭り独特の「ミュージック」が作り出されていた。

コナンと蘭は人ごみのなかをはぐれぬように手を繋いで歩く。周
りからしたら姉弟にしか見えないが、二人にとってはデートのよう
なものだ。この状況は、自分にとっては嬉し恥ずかし。何か気を紛
らわせるようなものはないか、とコナンは周りを見回しながら歩い
ていた。そんな中、蘭が一つの屋台を指差した。

「あ、射撃だ！ やってみようかな」

「蘭ねえちゃんって上手かったっけー？」とコナンがからかうように言うつと、

「言ったわね！ じゃあわたしと競争しよう！」

「いいよ！」

「じゃあ、二人でやります」

「はいよ、じゃあ三百円ね。それぞれ、百五十円で十発。数多く当たったほうが勝ち！ で、いいのかな？」

屋台のおじさんはにこにここと笑顔を浮かべながらそう言った。あの意味緊張していた雰囲気をごませてくれた彼に、二人は感謝していた。

結果的には、圧倒的な差をつけてコナンが勝った。

「ボクの勝ちだね！」

「む。本当だ……悔しいな」

そう言いながらも蘭は、得意げに笑うコナンを見て「全く、こういうことは得意なんだから」とつられて笑った。

「じゃあハイ、これ景品ね」と言って渡されたのは、コナンと蘭が当てた景品たちである。おもちゃのブリキに、指輪に、くまの小さなぬいぐるみなど。おじさんは袋に入れて渡してくれた。

「二人は姉弟だよな。美人でしっかりしたお姉さんを持って、キミは幸せだな」

おじさんの言葉にコナンは一瞬不機嫌そうな顔を見せたが、すぐに笑顔になって「うん」と答える。おじさんはコナンの変化には全

く気づいていないようだが、蘭にはすぐ分かった。

「じゃあねー！」

コナンは子供らしく手を振る。彼に合わせて蘭もペコリとお辞儀をした。

その後、買ったヤキソバとお茶を手に、コナンと蘭は屋台から少し離れた、人のいない川岸沿いの石垣に腰掛けた。

ぼんやりとした明かりが歩いている人々を照らしているのが見える。

「はい、これ。一緒に食べよ」

「ありがとう」

プラスチックのパックから輪ゴムを外し、それを開きながら蘭はコナンの横顔をちらりと見る。

「何？」

「いや、さつき、不機嫌そうにしてたから」

「……まあな」十七茶と書いてある、お茶の缶を開け苦笑しながら答えた。

「自業自得だから、しょうがないことだけだな」

「でも、それは。わたしだってちょっと嫌な気持ちになったよ。おじさんは悪くないけど……」『わたしたちは姉弟なんかじゃない！』
つて言いたくなったもん」

先刻の出来事のために、二人各々の衝動を抑えていた理性は途切れた。「自分たちは姉弟なんかじゃない」コナンも同じ思いを抱いていたのだ。そうして二人はいつの間にか「演じる」ことを止めて

いた。

蘭は割り箸をパチン、と割り、いただきますと言ってからヤキソバを食べ始める。ヤキソバ独特の香りが漂ってくるが、コナンはまだヤキソバに手をつけないで、先ほどの景品の入っている袋を見ている。

「食べないの？」

「いや、まあ……うーん……食べるか」

コナンはちよっと考えてから、袋から目を離し、ヤキソバの入っているプラスチックのパックに手を伸ばした。

それから二人とも喋らないまま、川岸での食事が進んでいった。

食事が終わった後も、二人して無言だった。川の水が流れる音と、祭りに来ている人々の声が遠くから聞こえてくる。

コナンは蘭を一瞥してからすぐにまっすぐ前を向き、会話を再開した。

「あのさ、蘭……ねえちゃん」

自分の現状を思い出して、コナンはもう一度「演じよう」と試みた。しかしコナンの意に反して、蘭は周りを見回し、誰もいないことを確認してから、こう答えた。

「……蘭、でいいよ」

「え」

「だから、コナンくんも……新一って呼ばせて」

「……分かった。じゃあ……蘭。これ、持っつけ」

蘭の手のひらに、先ほどのおもちゃの指輪を載せた。思いがけぬ出来事に、蘭はコナンの表情を見ようとすもの、彼は目を合わせようとしない。コナンの真意が汲み取れない蘭に、続ける。

「オレが持ってたつてしょうがねーしな」

「ありがと。大事にするね」

まるで結婚指輪を渡し渡される時のように、二人はどことなく緊張していた。たかがおもちゃの指輪と言うなかれ。二人にとっては、それが本物かおもちゃかというのは、関係ないことだった。

蘭は受け取った指輪を大事に握り締めながら、言った。

「新一がコナン君としてウチに来てから……わたし、何度も愚痴っちゃったり弱音吐いたりしてたね。まあ、コナン君が新一だとは知らなかったけどさ」

「気にしてんのか？」

「ばか、気にするに決まってるじゃない！」

蘭はそう言っつて、ずっと前を向いたままのコナンの顔を覗き込んだ。その時バチ、と稲妻が走ったかのように目線が合った。目の前にいる人は、見かけは小学生の姿をしていても自分の幼なじみなんだ、と分かっているから、心臓の鼓動は高鳴る。他の人からしたら姉弟にしか見えなくても、目が合っている時だけは、自分たちは自由になれる。コナンも、そう思っていた。

コナンは今の状況をちゃんと認識したところで、顔が真っ赤になった（ほどよい暗闇のおかげで、蘭はそれには気づいていない）。そこで何から切り出したらいいか分からずにいると、蘭がふつと笑みを浮かべて言った。

「そろそろ、花火が始まる時間だね」

「……………ああ」

「ここなら、木とか何も邪魔するものもないし、いい場所見つけたね」

「……………ああ」

直後、花火大会の始まりを告げるブザーが辺りに響き渡った。それと同時に、蘭はコナンの手を軽く握った。戸惑いながらも、コナンもその手を握り返した。

「ねえ、新一！ わたしね、……………」

「え、何だって？」

蘭の言葉は、大会一発目の花火　スターマインの音と他の観客の歓声にかき消された。

「……………ううん、何でもない」

コナンが言葉の続きを聞くことになるのは、それから少し後の話である。

『わたしね、新一のこと、大好きだよ』

story・13 ボクの背中には羽根がある（後書き）

story・5の設定、個人的に好きなので思わず続編を書いちゃいました（笑）

【参考にした曲】 Kinki Kids「ボクの背中には羽根がある」

良くも悪くも……今日も、いつもと同じだ。わたしは、少し前を歩く新一の背中を見ながら、小さくため息をついた。「幼なじみ」という肩書きを利用して、わたしは彼のそばにいる。二人で一緒にいられる理由にしてきた。

これって、ずるいのかな。自分に問い掛けてみるけれど、答えをすぐに出すのは困難だと思った。好きな人のそばにいたいって思うのは当然のことだと、わたしだつて分かってる。だけど、わたしの他にもたくさん、新一の隣にいたいって思ってる子はいる。ずっと昔から新一を見てきたから、そのことだつて分かってる。わたしなんかよりも可愛い子に、新一は何度も告白されてきた。その度にわたしは表面上は冷静を保つてたけれど、内心は、いつか新一が誰かと付き合い始めちゃうんじゃないかって怖かった。正確に言うなら、今でも怖い。けれど、自分の気持ちを伝えるのは……。数秒考えて、出来ないや、と呟いた。

「……何か言つたか？」

聞こえてたんだ。わたしはちょっとびっくりしたけど、何でもないよ、と言つてごまかした。

新一はそれ以上追及することもなく、くるりと前を向くと、また歩き始めた。

こういうところは鋭いんだから。わたしは、今度は聞こえないようにすごく小さな声で呟いた。そして、また考え事に戻る。

うん、やっぱりわたしは、ずるいんだな。結論は案外あっさり出た。恋人同士じゃないんだから、一緒にいたいなんて直接言える間柄じゃないんだもの。

「おーい、蘭。今日のオメー、変だぞ？ 熱でもあるのか？」

急に新一がわたしの顔を覗き込んできた。思いがけず近づいた距離に驚いて、わたしは思わず後ずりしながら、

「ばっ、ばっ！ 熱なんかないわよっ」

「？ どうしたんだよ」

「どうもしないわよっ」

わたしはハテナマークをたくさん浮かべている新一を、大股で歩いて抜かした。

どうした？ なんて、聞かないでよ……わたしが一番よく分からないんだもん！ 自分の顔が徐々に熱を持っていくのが分かった。頬を両手で押さえて熱を発散させようとするけれど、逆効果だった。今はただ、新一にこの顔を見られないようにするのみだ。わたしは早足になって、半ば新一から逃げているような状態になる。

「……………変なの」

新一の声が聞こえたけれど、わたしは振り向かない。

いつか、新一がわたしの気持ちを知る時は来るんだろうか？ そしてわたしが新一に自分の気持ちを伝える時は……？ 怖いから、今は考えられないや。

気づいてほしいような、ずっと隠してしまいたいような、複雑な気持ち。わたしは今日もこんな気持ちを抱きながら、過ごしていく。これからどうなるかどうかは……今は、考えないことにした。

story・14 微かなカオリ（後書き）

お久しぶりです。

新年度に入ってから、今まで経験したことがないくらい忙しくなりまして、全然執筆する時間が取れませんでした（・ー・；）
リハビリ的な感じで投稿しました。相変わらず既視感が半端ない作品になってますが。次に更新できるのはいつになるんだろうか……
申し訳ありませんが、自分でも全く分かりません（・o・；）
たまーに思い出したら見に来てみてください。

【参考にした曲】微かなカオリ / Perfume

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5789/>

主観論？

2011年10月3日20時45分発行